

ヌスバウム「性的モノ化」(違法ゲリラ訳)

江口聡と ChatGPT 訳*

2024-12-01

私たちはモノ^{オブジェクト}であり、商品であるということ、そして一部の女は他よりも金がかかると思われていること、これは真理でありまさしくツボを突いている——しかし、自分が人間であることを、いつもいつも主張しなければ、女はモノと対比される意味での何者かにはなれない。これこそが結局私たちの苦闘の核心なのだ。

アンドレア・ドゥオーキン『女性憎悪』

「性的モノ化」はすでになじみ深い概念だ。かつてはフェミニスト理論での比較的専門的な用語であり、特にキャサリン・マッキノンとアンドレア・ドゥオーキンの著作に結びつけられていた。現在では「モノ化」は人々の日常生活に日常生活の一部になっている。この言葉が、広告や映画その他の表現物を批判するために使われているのを目にすることは多いし、またある人物の他の人物に対する、また自分自身の他人に対する態度や意図に関しての疑念を表すときにも使われる。一般に、この言葉は非難語 *pejorative* として使われていて、その発話者が、道徳的・社会的に非難可能であると考えられる話し方、考え方、そしてふるまい方を指すもので、つねにではないにしても、性的な領域でのことがらに使われることが多い。こうして、キャサリン・マッキノンはポルノグラフィについて次のように書いている。「自然な身体之美を賞賛することがモノ化になる。害のなさが危害になる*1」。事実、「性的なオブジェクトとして、モノとして、あるいは商品として非人間化された」女性の描写は、マッキノンとドゥオーキンが提案したミネアポリス条例において、告訴可能とされるポルノグラフィ的表現物の第一カテゴリーになっている*2。同じ種類の非難的な用法は、人々や事件に関する日常的な社会的な論議でもよく見られる。

さらに、フェミニスト思想はこれまで、男性による女性の性的モノ化を、女性の生活における瑣末事ではなく中心的な問題であると考えており、それに反対することはフェミニスト政治のまさに核心部分にあるとみなしている。キャサリン・マッキノンにとっては、「女性の性的モノ化の内密な経験は……^{フェミニル}女^{ジェンダー}としての女性の生活の決定要因であり、その同義語なのだ」*3。モノ化は、女性が「自分自身をたんなるモノ^{thing}として把握する^{イグジステン}生^ををみだす*4。さらには、この致命的な経験は、マッキノンの見方では、不可避である。まったく印象的な比喩として、彼女はこのように語っている。「魚が水のなかで暮しているように、あらゆる

*eguchi.satoshi@gmail.com “Think!, It’s not illegal, yet!”

*1 Catherine MacKinnon, *Feminism Unmodified*, p.174.

*2 See MacKinnon, *Feminism*, p. 262 n. 1. インディアナポリス条例は、*American Booksellers, Inc. v. Hudnut* (598 F. Supp. 1316 [S.D. Ind. 1984]) で無効とされたが、関連するカテゴリを使用している。「女性が支配、征服、侵害、搾取、所有、あるいは利用のための性的対象として提示されている…」

*3 MacKinnon, *Toward a Feminist Theory of the State* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1989), p. 124.

*4 Ibid.

女性は性的モノ化のなかで暮している」——つまり、おそらく、モノ化は女性をとりこんでいるだけではなく、それによって、女性はモノ化から生活に必要なさまざまなものごとをとりこむようなものになってしまうのだ。しかし女性は魚ではなく、マッキノンにとってモノ化は悪しきものである。なぜなら、それは女性を完全なる自己表現と自己決定から——そしてさらには、その人間性から切り離してしまうからだ。

しかし「モノ化」という後は、若干混乱をまねく形ではあるが、もっとポジティブな雰囲気ですでに使われることもありえる。実際、フェミニスト思想家の著作物で、こうした一見して対立するような使用の両方を見つける場合も少なくない。たとえば、一般にマッキノンのセクシュアリティ批判を支持している法学者のキャス・サンステインがあげられる。ポルノグラフィについてのこれまでの考察群を通してサンステインは女性を男性が使用し支配しモノとして扱うことを、ポルノグラフィ的表現物の悪さの中心であると語っている*5。しかし一方、ナディン・ストロッセンのポルノグラフィ擁護の新刊*6をおおかたネガティブに批評するなかで、サンステインは次のように書いている。

人々のイマジネーションというものは扱いにくいものだ……一部の人々が論じるように、モノ化およびある種の使用は、セックスライフの重要な部分であると、さらにはセックスライフのワンダフルな部分であると、あるいはセックスライフの抜きがたい部分であると論じることも可能かもしれない。平等と尊敬と同意という文脈の内部でならば、モノ化——まったくのところ簡単に定義できる概念ではないが——はさほど問題のあることではないかもしれない*7。

たしかにサンステインは、その発想を用心深く、もしかしたら可能かもしれない議論として語っていて、その議論を自分自身でサポートしようとはしていない。しかしながら、フェミニズムの核心部分としてのモノ化に対する批判を奉じるマッキノンとドゥオーキンに対しては、このパラグラフは奇妙なものに見えるかもしれない。彼女たちが次のようにたずねるはもっともなことだ。「いったいサンステインはなにを弁護しようとしているのか？なぜ「モノ化およびある種の使用」がセックスライフの「ワンダフル」で「抜きがたい」部分であるというのか？「だれか」を「なにか」として使用することは、常に悪ではないのか？そしてなぜ、私たちがモノ化を「平等と尊敬と同意」と組み合わせることができるか？それこそ私たちが不可能だと証明したことがらではないか？」、と。

ここで私が追求したい直感、こうした混乱は、私たち自身がまだモノ化のはっきりした概念をもっていないからではないか、というものだ。そしてもし私たちがそれを見つけ出すことができたとするなら、それはすべりやすい概念であるだけでなく、複数要素からなる概念である、ということが判明するだろう、ということだ。この語によってさしめられる少なくとも七つの別々のふるまいが存在しており、さらにそれらの間に多くの複雑な連関があるということを私は論じるつもりである。ある種の明細化をおこなうなら、モノ化は常に道徳的に問題があると私は論じるつもりである。また別の明細化をおこなうならば、モノ化はよいものでもあり悪いものでもあり、それは文脈に依存する。(サンステインが文脈の重要性を強調したのは正しく、私はその点を掘り下げるつもりである。)さらに、モノ化のある特徴群は、サンステインが示唆するように、ある種の状況下では、セックスライフの必須の一部であり、あるいはワンダフルな部分でさえあるかもしれない。これを理解するためには、不可能であると言われているようなモノ化と「平等と尊敬と同意」との組み合わせ

*5Cass Sunstein, *The Partial Constitution* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1993) pp. 257-90; also "Neutrality in Constitutional Law (with Special Reference to Pornography, Abortion, and Surrogacy)," *Columbia Law Review* 92 (1992): 1-52.

*6Nadine Strossen, *Defending Pornography: Free Speech, Sex, and the Fight for Women's Rights* (New York: Scribner, 1995).

*7Sunstein, review of Strossen, *The New Republic*, 9 January 1995.

がいかにして成立しうるか、ということをも理解しなければならないだろう。

私は一連の事例からはじめたい。あとでそれに戻るつもりである。以下のすべては、ある人物が他の人物をモノ化している、誰かをモノ^{オブジェクト}として見たり扱ったりしていると呼びうるような事例である。すべての事例で、モノ化されている人物は性的なパートナーあるいはそうなりうる人物であるが、ただしすべてのケースで性的な文脈がどれも同じようにはっきりしているわけではない。さまざまなスタイルのものから例を選んだのは意図的である。また、男性が女性をモノ化しているサンプルには制限しなかった。私たちの事例についての判断が、社会的文脈や社会的権力といういっそう大きな問題に影響されていることことを知る必要があるからである。

[1.] 彼の血は、欲情の波に高く脈打った。彼女に近づき、彼女と一つになりたい欲情は感じている。手さえ伸ばせば、彼女はそこにいるのだ。すぐ前にいる彼女の迫真感が、彼の意識をすっかり呑みつくしてしまった。打ち砕かれた彼は、ひたすら^{めし}盲いたもののように、一步一步強く彼女に迫っていった。いわば彼自身の最高完成をつかむために、そしてまた同時に、彼の全存在を呑みこんで、やがてまたその彼を吐きもどす暗黒の中へと迎えられるためにだ。もし彼が真に燃えさかる暗黒の核心にまで至りえて、真に打ち砕かれ、彼女とともに、一つ極致の歓喜に輝きわたるまで燃え上がることさえできれば、それこそまさに最高の幸福であろう。(D. H. ロレンス、『虹』、中野好夫訳、新潮世界文学 40『ロレンス II』、新潮社、1971、409 頁)

[2.] yes だって彼はあのものすごく大きなまっかなけものみみたいなので3かいか4かい行ったにちがいないわ血管とかなんとなが破れつすると思ったくらいでも彼の鼻はそんなに大きくないんだけどよろい戸とおろして身につけてるものをすっかりぬいでからその前になん時かんもかかって服を着たり香すいをつけたりくしをいれたりしたくせにあれがまるで火のしかあつぽったいかなてこみたいにはじめから終りまでつつ立ってきつと彼はオイスターを食べたのねなんダースもそして彼はすてきな歌うたうような声でああこんなにすばらしいので私を一ぱいにみたくしてくれる人は生まれてはじめてきつと彼はあとで羊を1ぴき食べたでしょうよあたしたちのまん中にあなを1つこんなぐあいにあけたのはどういう気かしらまるでたね馬みたいにあれをあたしたちの中につき入れるただそれだけが彼らが女にもとめるものそれに彼はあんなにきっぱりとした意じわるな目つきであたしは目をうすくつむらなくちゃならなかったわでも彼にはおつゆがそんなにたっぷりなかった(ジェームズ・ジョイス、『ユリシーズ』、丸谷才一・氷川玲二・高松雄一訳、集英社、2003、文庫版第4巻289頁)

[3.] 彼女は体に布をかけられている。それは彼女の体の輪郭にそってひだをなしている。彼女は動かない。死んでるのかもしれないとマクレーは思った……突然、彼女を犯したいという欲望が6000ボルトの電気ショックのように体をつらぬいた。それは、冒瀆したい、破壊したいという欲望だった。彼女の尻の割れ目のあいだ、彼の両親指が爪を内側に関節と関節を合わせ合わされ、彼女のなかでそれを広げた。海の底から聞こえるような叫び声が彼女の深い眠りから発せられた。彼女は自己の感覚なしに、歩きだそうとして腰をまげ、なかば歩きだそうとし、なかば夢みていた……するどい痛みが彼女の内蔵を襲った——イザベルは眼を開いたが、どこにいるのか、なにがおこっているのか、それがなぜそうなっているのかはなにもわからなかった。彼女の顔はひび割れた石膏の覆われ動かすことができなかった……マクレーはさらに彼女の内蔵をまさぐって叫び声をひきだした。彼女の頭は壁に強く打ち付けられた……彼女の手が、まだその尻を掴んでいるマクレーの手に触れた。その手は、まだ尻をもみまさぐりつづけていた。絶望と欲望から生まれた暴力とともに、彼女を完全に手に入れたいという欲望とともに

に……あたかも彼は彼女の肉を自分自身の手のなかで味わい、つぶし、とけあために引き裂きたいかのようだった……そしてイザベルは「やめないで、やめないで」と叫ぶ声を聞いた。なにか彼女自身の深いところから、過去の時代から、世界がまだ若かったころの祖先の声が「やめないで、やめないで」と叫んでいた。この先祖帰りの声はいまもっと近くにあった。彼女は驚きとともに理解した、それは自分の口から出ているのだ、動いているのは自分の唇だ、それは自分の声なのだ。(ローレンス・セントクレア、『イザベルとヴェロニク：四ヶ月・四つの都市』から)

[4.] クリス・エヴァート杯プロ・有名人テニス大会でプレイしているニコレット・シェリダンの3枚の写真。彼女のスカートはめくれあがり、黒いアンダーパンツが見えている。「オレたちがテニスを好きな理由」というキャプション。Playboy, April 1995

[5.] シャワー・ルームで硬くなってしまふのが初めは恥ずかしかった。でもザ・^{スイミングクラブ}コーリーでは多くの連中がわざと刺激的に石鹸でコックを擦っていた。メンバーの何人もがここで日課のように勃起する。多くの勃起はそんなに頻繁じゃなかったが、それでもみんなに期待されたし見られてもいたと思う。……クラブ生活に対する儀式にも似た愛着を生み出すこの裸のごたまぜは、たしかにジャケットとネクタイ、^{サイクル・クリップス}自転車用の裾留とダッフルコートという世界に移っては生き残ることのできない夢の密通関係とか一夫多妻的ハプニングとかに対する不道徳な扇動を行なうのだ。それに、シャワーの中で社交的な優美さを保っていることのむずかしさ。この巨大なアフリカの隣人に、ぼくはいまどうすればにっこり笑いかけられるというのか？ぼくの勃起には像みたいに反応してはいるけど、そのとなりのシャワーの下でニヤつくあのガキみたいな不吉な男には彼はなおも顰めっ面を向けているのだ。(アラン・ホリングハーストの『スイミングプール・ライブラリー』、北丸雄二訳、早川書房、1994、24-25頁)

[6.] すでに彼女は彼と腕を組んでいたが、部屋の中のほかの品々、ほかの絵、ソファー、テーブル、戸棚、「重要な」美術品など、どれをとっても見事な品々が、あたかも心あるもののように二人の周囲立ち上って、価値を認められ誉め称えられることを求めているかのように見えた。二人は次から次へと一緒に眼を注いで、その品々の全てが気高いのを見てとった——あたかも彼のために、昔の判断が賢明だったことを確かめようとでもするかのよう。腰を下して語り合いながらお茶を飲んでいる二人の気品に満ちた人物が部屋全体の素晴らしい効果と調和の一部分になったのはその結果である——明らかにヴァーヴァー夫人と公爵は、全く知らず知らずのうちに、このような部屋が審美的な意味で必要とする人間家具の中でも最高の品質を誇るものとして、自分たち自身を「配置」したのだった。部屋の装飾に溶けこみ、選択の妙を得た装飾の効果を高めている二人の姿は、完璧で見事だった——とはいえ注意深い人の眼には、この場合に本当に必要とされる以上に鋭い人の眼には、二人の姿は類稀な購買力の具体的な証明だというふうに映ったかもしれないけれども。事実やがてヴァーヴァー氏が口を開いた時には、その口調にはさまざまな意味合いが感じられたのであって、彼の考えがとどまることを知らないのは周知の事実ではなかったか？「いい買い物をしたね。いくつかいいものがあるじゃないか。」(ヘンリー・ジェイムズ、『黄金の盃』、青木次生訳、講談社、2001、下巻 469 頁)*⁸

*⁸Passages are taken from: D. H. Lawrence, *The Rainbow* (London: Penguin, 1989; first publication 1915), pp. 132-33; James Joyce, *Ulysses* (New York: Modern Library, 1961; first copyright 1914), p. 742; "Laurence St. Clair," *Isabelle and Veronique: Four Months, Four Cities* (New York: Blue Moon Books, Inc., 1989), pp. 2-4 (of 181 pages); Alan Hollinghurst, *The Swimming-Pool Library* (New York: Vintage, 1989; first published 1988), p. 20; Henry James, *The Golden Bowl* (New York: Penguin Books, 1985; first published 1904), p. 574.

ほとんどの作品と著者はよく知られている。ホリングハーストの AIDS 以前のゲイ・ロンドン小説は 1980 年代のエロティック作品のなかでも最重要とされている。ローレンス・セントクレアの作品になじみのない読者には、セントクレアはジェームズ・ハンキンソンの偽名であると指摘すればおそらく十分だろう。彼はギリサ哲学研究者でありテキサス大学オースティン校の哲学教授であり、標準的なハードコアポルノラフィーシリーズ小説を執筆し、のちにその著者であるとして有名になった。

さて、私たちはなんらかの意味で「モノ化」の名に値する五つのふるまいを手に行っている。それぞれの事例で、人間は、性的関係の文脈でモノと見なされ、また／あるいは取り扱われている。[『虹』での] トム・ブランゲンは自分の妻を神秘的な自然の力、「暗く焼けつく^{カーネル}核」と見ている。[『ユリシーズ』での] モリーはブレイズ・ポイランをその性器に還元し、彼を種馬と比べそれにも劣る人間らしさだと冗談を言う。ハンキンソンの主人公マクラエは、寝ているイザベルに侵入し破壊するの適当な、成熟した前人間的・前意識的存在として扱っており、その発する人間に似た声は、痛みを与えることがまさにふさわしいことを保証してくれるようなものである。『プレイボーイ』のキャプションは若い女優でありかつ熟練したテニスプレイヤーを男性の使用のために十分熟した肉体に還元する。彼女は自分自身を熟練した運動選手として提示していると考えているのだが、そのあいだにも、彼女はオレたちの視線に対してセクシャルなモノとして自分を提示してしまっているのだ。ホリングハーストの主人公は、仲間のロンドン子たちを、どれも同じように交換可能な肉体、あるいは肉体パーツとして見るができる存在として自分自身を描いている。シャワールームの性的な視線のもとで、階級や地位といった関係を歪ませる考慮事項などはまったく独立にそうしたことがおこなわれるのだ。マギーとアダムは、それぞれの配偶者を、収集しどこかに飾りつけることができる値段のつけようがないアンティークのようなものと見ている。

文学作品のこうした分析では、私たちはある登場人物が別の登場人物をモノ化することと、全体として見たテキストが人々のをモノ化していることとを区別する必要がある。どちらも私にとっては道徳的な評価をおこなうことが可能な人間の行動として興味をそそるものだが、私の分析とポルノをめぐる論争とのつながりからすれば、表現されている行動の道徳性に加え、表現すること⁹に含まれる行動の道徳性にも注意を向けたい。どちらの行動も道徳的に評価されるが、それはべつべつになされるべきである。これはしばしばかなり難しいことではあるのだが、そうした試みはなされなければならない。というのは、複数の重要な道徳的問題がまさにその違いにかかっているからであり、文学の事例をあつかうには私たちはそれにとりくまねばならないからだ。よろこばしいことに、文学の倫理的批評はこれまでに私達を手助けしてくれるような豊かな区別のセットを開発してくれている。特に役に立つのが、ウェイン・ブースの三つ組の区別である。それは、(a) テキストの語り手 (narrator) (そして／または他の登場人物)、(b) 含意されている作者 (implied author)、すなわち、全体としてのテキストのなかに具現化された生活のセンス、そして (c) 生身の作者 (real-life author)、つまり含意された作者には欠けている多くの特性をもち、また含意された作者がもっている特性を欠いているような人物、の三つの区別である¹⁰。ブースが論じ、私も同意するところでは、テキストにおいて表現される行為に対する倫理的批評と、全体としてのテキストに対する倫理的批評とは別のものである。後者に到達するには、私たちは含意されている作者に焦点を当てて、全体としてのテキストが読者としての私たちとどのような相互作用をうながすか、どのような欲望や構想^{プロジェクト}を目標めさせ構築するか、ということをお問ねしなければならない。このようにして、テキストの倫理的批評は、文学としての形式に敏感 (sensitive) であると同時に、人物の倫

⁹On the artist's creative activity as an example of morally assessable conduct, see my discussion of Henry James in "Finely Aware and Richly Responsible": Literature and the Moral Imagination," in *Love's Knowledge* (New York: Oxford University Press, 1990).

¹⁰Booth, *The Company We Keep: An Ethics of Fiction*, University of California Press, 1988.

理的評価とも連続的なのだ*11。

ここで私たちが言うべきことは、次のようになるだろう。おそらく、ブランゲンが妻を見る視線はロレンスが全体としてのテキストや他の関連するテキストで提唱している態度の典型的なものだ。一方、モリー・ブルームのボイランに対する態度は、ジョイスが描いた、性的関係への唯一の態度、といったものとはほど遠く、それはモリーの想像の描写においてさえそうである。ハンキンソンのテキスト全体は、引用した一節のようなしかたで女性をモノ化している。あれは次第に暴力的になる一連のエピソードの最初のものにすぎず、あしたものがからみあって彼の「小説」を成り立たせている*12。『プレイボーイ』の女性の身体と業績に対する典型的なアプローチは、私があげた例でうまくとらえられていると思う。ヘンリー・ジェームズの小説は、それと対照的に、登場人物たちを、他人をモノ化する人々として描くことによって、重大な道徳的批判を目覚めさせるものだ。ホリングハーストはこの事例群のなかでもっとも困惑させるもので、全体としてのテキストが、私たちが登場人物とそのファンタジーについてどういう態度をとるように誘っているのか私にとっては不明確なままである。

上のテキストに対する私の反応を書いておくことにしよう。私は、上のどの事例も道徳的な複雑さをまぬがれていないと思うし、またそのどれもが万人が好みに合うようなものではないと思うが、そのなかの二つ、あるいは三つが、特別によこしまな^{シニスター}ものとしてきわだっていると思う。(ジェームズの登場人物は、私をもっとも「^{エヴィル}邪悪」という語を使いたい人物たちである。)少なくとも、テキストの一つは、モノ化がきわめて無害で、快適なのでさえあることを示してくれている。また少なくとも一つは(おそらく二つ以上あるが)、一部の人がそれはセックスライフのワンダフルな部分であると言いたくなるようなものだ。グループとして見ると、上の事例群は、モノ化の別々の次元を区別し、たがいの独立性に注意するようにうながしてくれるものだ。私が論じたいのは、私たちがそのように区別するならば、私たちはすべてのタイプのモノ化が同じように非難すべきものだというわけではないことを見いだすだろう、ということである。事例のそれぞれを評価するには、文脈と環境を注意深く評価する必要がある。そして、私たちが必要不可欠な区別をしたならば、少なくともその一部は同意と平等と両立可能であり、セックスライフの「ワンダフル」な部分でさえある、ということが理解できるようになるだろう。

1. 人をモノとしてとりあつかう七つの方法

さて、分析をはじめることにはしよう。モノ化のすべての例で、問題とされているのは、あるものを別のものとしてとりあつかうということだ。本当はモノではないものを、すなわち人間を、モノとしてとりあつかっている。冒頭にエピグラフとして掲げたドゥオーキンの文章では、人間性という観念はカント主義的なものであり、私の考えでは、このカント主義的な観念が、マッキノン／ドゥオーキンの伝統でのモノ化批判のほとんどで暗黙的に前提されている。しかし、これに満足せず、私たちはモノとして扱うという発想に含まれているものはなんであるかを問う必要がある。私は少なくとも以下の七つの観念がこの発想に含まれていると思う。

1. 道具性 (Instrumentality) : モノ化する者は、そのモノを自分の目的のための道具として扱う
2. 自律の否定 (Denial of autonomy) モノ化する者は、そのモノを自律性や自己決定を欠如しているものとしてあつかう

*11 See Booth, Company, Chap. 3. 彼はアリストテレスの友情に関する記述を用いて、さまざまな種類のテキストと共に時間を過ごすことの倫理的価値について問いかけている。

*12 私はここでテキストについてのみ言及しており、ハンキンソン自身の動機や見解については何も主張しない。彼がこのジャンルで執筆する理由は多岐にわたるかもしれない。私たちは、ブースの「暗示された作者」と「実在の作者」の区別を厳密に守るべきである。

3. 不活性 (Inertness)：モノ化する者は、そのモノを行為者性がないもの、そしてまた活動性がないものとしてあつかう
4. 代替可能性 (Fungibility)：モノ化する者はその者を、交換可能なものとしてあつかう。交換可能なものは、(a) 同じタイプの別のモノと、また／あるいは (b) 別のタイプのモノとの二つの場合がある
5. 毀損侵入可能性 (Violability)：モノ化する者は、そのモノを境界・統合性 (boundary-integrity) をもたないものとして、すなわち引き裂いたり、粉碎したり、侵入したりすることが許されうものとしてあつかう。
6. 所有可能性 (Ownership)：モノ化する者は、そのモノを他者によって所有されうもの、売買等ができるものとしてあつかう
7. 主観性の否定 (Denial of subjectivity)：モノ化する者は、そのモノを、その経験や感情（仮にそれらをもっているとして）配慮する必要がないものとしてあつかう^{*13}

れらはそれぞれ、私たちが物^{シング}を扱うときの特徴であるが、もちろん、すべての物を、上の全部のしかたで扱っているわけではない。物をモノとして扱うことはモノ化ではない、というのは、先に述べたように、モノ化とは本当は物ではないものを物にすること、物として扱うことを意味しているからである。しかし、私たちが物を扱うおなじみのやりかたをすこし考えてみるのは役にたつ。これらの七つの特徴がよく見られるものであり、またたがいに別のものであることがわかるからだ。ほとんどの生命のないモノは、通常、私たちの目的のための道具として考えられている。ただし一部のものはその美や、その古さや、あるいはその自然さのために敬意に値するとみなされている。ほとんどの生命のないモノは自律能力がないものとして扱われているが、時には自然におけるモノ、あるいは一部の機械をも、それ自身の生命をもっているものとも考えることがある。多くのモノは不活性であり、また／あるいは受動的なものであるが、すべてがそうであるわけではない。多くのモノは同じ種のモノと交換可能で（たとえばボールペン）、また時には他の種のものとも交換可能である（ペンとワードプロセッサ）が、もちろんそうでないものも多い。一部のモノは「破壊可能」^{*14}であり境界統合性をもっていないと見られているが、すべてがそうだというわけではない。子供たちに、壊してもよいと許せるものは、家のなかでは比較的少ないだろう。多くのものは所有可能であり、そういうものとして扱われているが、そうでないものもやはり多い。（生命のないモノのなかでも、所有されえないもの——大部分は自然の一部——が、私たちが特に自律性や内在的な価値があると考えられるものであることは興味深い。）最後に、ほとんどのモノはその経験や感覚を配慮する必要のないものとして扱われているが、特に自然環境の一部をちがったふうに考えるようにうながされている。それが不当な擬人化なのかそうではないのかはここでは決められない。いずれにしても、上のリストには、物に対するよくある態度のクラスターを見てとることができる。そして、そのそれぞれが、人物のモノ化^{パーソナル}についてのフェミニストの議論においてはそれなりの役割を果たしていることがわかるだろう。モノ化とは、人々を上にあげた仕方のいずれかで扱うことである。

上のそれぞれが、人のモノ化の十分条件であるかを決める必要があるだろうか？それとも、十分条件を提出するには、そうした特徴のクラスターが必要だろうか？私はこの問題にはますますには答えたくない。というのは、モノ化という語の使用法はあまりにも不明瞭だからである。全体としては、「モノ化」は比較的ルーズなクラスター語であり、この語を適用するにあたっては、時にはその特徴の一つを十分条件としてあつかうこ

^{*13} これらの7つの要素は、それぞれの核心概念の適切な分析に関する議論と関連して、さらなる精緻化が必要になるだろう。たとえば、自律性や主体性とは何かについては多くの理論が存在する。

^{*14} 「」で括ったのは、この言葉が理想的ではないと意識しているからである。ボールペンのようなものに対しては、あまりにも人間的すぎる表現だ。

ともあるが、実際にその語が適用される場合には複数の特徴が存在している場合の方がしばしばだからである。明らかに、私たちが標準的に物を扱うには、上にあげたもの以外のやりかたがある——それに触れたり、見たりするといったことだ——。こうした場合、私たちがその方法を人物にあてはめても、モノ化ということにはならない。それゆえ、私たちは上の七つの項目が少なくとも多くの人が道徳的に問題ありとみなすものの指標であると考えられる理由があるということになるだろう。そして、リストのなかの一部の項目——特に自律の否定と主観性の否定——は、そもそものはじめから私たちの注意をひくものだ。単なる物のあつかい方については、自律や主観性といった問題は生じないのだから、これらはわざわざ論じるまでもないと思われるからである。ここから、こうした一部の項目は以下で私たちに特別な関心をひくものとなりえる。また、それらが人々に対してふさわしい扱い方においても、また人々に対して正しく与えられないような場合の扱いについても私たちは関心をもつことになるだろう*15。

上の諸特徴はどのように関連しているだろうか？まず、物の世界からふたつ例をとってくるのが役に立つだろう。ポールペンとクロード・モネの絵画だ。ポールペンがモノであるということは、上のリストのすべての項目を含んでいるように思われるが、ひょっとすると毀損可能性についてはそうでないかもしれない。つまり、ポールペンをへし折ってしまうのは行儀がよくないとか少なくとも浪費的だということはあるかもしれないが、それが道徳的にひどく問題になるということはないと私は思う。ペンを道具として使うこと、非自律的で、不活性で、交換可能で（他のペンや他の道具や機械と）、所有可能で、主観性を欠如しているものとして使うこと——これらはすべてそれをあつかう標準的で適切なやりかたである。一方、絵画作品はもまた、たしかに非自律的で、所有されるもので、不活性で（受動的ではないかもしれないが）、主観性を欠如している。しかしそれは、他の絵画作品とは交換可能ではない。また、売買するということの限定された意味を除いては、他のなものとも交換可能ではない。売買が可能だということは完全に代替可能だということの意味するわけではない。絵画の〔モノとしての〕境界は貴重なものであって、単にそれを使用し享受する人々の目的のための道具にすぎないのかどうかということは本物の問題である。ここからすぐにわかることは、モノというものにはさまざまな種類があるということとおである。一部のモノは貴重なモノであり、こうしたものはふつう代替可能性をもっておらず、ある種の境界統合性（毀損不可能性）をもっている*16。他のものはさほど貴重ではなく、代替可能で、破壊しても問題がない。

リストの項目は、別の意味でも別々のものである。すでに見たように、自律性を欠如した絵画のケースが必ずしも道具性を意味するわけではない。もっとも、道具的に扱うことは非自律的なものとしてあつかうことではあるかもしれない。私たちの議論のあとで目的からすれば、ほとんどのモノは不活性であるという事実を認めるとしても、不活性が自律の欠如や道具性の欠如の必要条件ではないということは隠しようがない。ワードプロセッサが便利である点が、まさにそれを私の目的のためのよい道具にしてくれる点であるのだが、それはワードプロセッサは不活性ではない、という点だ。また、道具性が感覚や主観性に対する配慮の欠如を含意するわけではない——道具としてつかうという目的のためには、その経験を配慮する必要があることもある

*15 「侵害可能性」についても同様である（上記の脚注 14 を参照）。ただし、「破壊許容性」という用語を選んだ場合はそうではない。

*16 この点に関連して、芸術作品の創作者の「モラル・ライツ」〔日本では「著作者人格権」〕に関する法的原則を考えることは興味深い。この権利は、ヨーロッパの多くの地域で、そしてアメリカでも増加傾向にあり、創作者が所有権を放棄した後でも、作品に対する不適切な改変から創作者を保護するものである。技術的には、これらは作品そのものではなく、創作者の権利であり、共同制作作品では他のすべての共同創作者の同意なしには放棄できないが、その結果、作品そのものが毀損や破壊、不許可の改変に対して権利を持つような状況が生まれる。For a good summary of the doctrine, see Martin A. Roeder, "The Doctrine of Moral Right: A Study in the Law of Artists, Authors and Creators," *Harvard Law Review* 53 (1940): 554-78; see also Peter H. Karlen, "Joint Ownership of Moral Rights," *Journal of Copyright Society of the U.S.A.* (1991): 242-75; for criticism of some recent U. S. state laws, see Thomas J. Davis, Jr., "Fine Art and Moral Rights: The Immoral Triumph of Emotionalism," *Hofstra Law Review* 17 (1989): 317 ff. I am grateful to William Landes for these references.

だろう（あとでポルノグラフィの例がそれをはっきりしめしてくれるだろう）。毀損可能性については、他の六つの項目から含意されるものではないように思われる。代替可能な事物でさえ、一般に壊したり粉々にしたりしてまったくかまわないとみなされるわけではない。もっとも、壊してもかまわないものはたいてい代替可能なものであり、それはその種の他のもので置き換えることができることがはっきりしているからだ。

さらに、ほとんどのモノが所有されているというからといって、所有がリストの他の項目から含意されているわけではないのははっきりしている。では所有は他のものを含意するだろうか？代替可能性がそうではないことは、絵画のケースで示した。毀損可能性も、不活性も、おそらく道具性もそうではない。これは家にいるペットやさらには植物に対する私たちの態度が示している。（私たちはペットや植物を私たちの目的のための単なる道具とは考えていない。）しかしおそらく、所有は、自己決定と自律の欠如は含意しているようだ。たしかにある事物が所有されていなくとも自律を欠いているということはあるだろうが、所有できるということは自己決定や自律が不在であるということと概念的に結びついているように見える。

最後に、ある物はその経験や感覚を考慮する必要がないものとして扱われることがあるが、これは、それが単なる道具として、あるいは代替可能なものとして、あるいは毀損可能なものとして扱われているということとを必要としない——どれもモネの絵画のケースで示されている。また所有されるものとして見られていなくとも（グランドキャニオンやモハヴェ砂漠）、不活性なものともみなされていなくとも（私のワープロ）経験や感覚を考慮する必要がない場合がある。もしあるモノをその感覚や経験を考慮する必要がないものとして扱うとすれば、それはそれを自律的なものとして扱うことと整合的だろうか？私はおそらく整合的ではないと思う。また、ここにも概念的なつながりがあるように見える。

さらにいえば、私たちが発見しつつあるのは、自律はある意味で私たちのリストのなかでもっともさしこまれた観念である、ということだ。生命のない物が自律的なものとしてあつかわれる、というケースを想像するのは不可能ではないにしてもむずかしいが、リストの他のものについてはすべて例外を考えることができる。そして、あるものを自律的なものとしてあつかうことは、それを非道具的にあつかうこと、それを単に不活性ではないものとしてあつかうこと、所有されないものとしてあつかうこと、感覚を配慮する必要がないものとして扱うことを含意しているように思われる。さらには、自律的なものとして扱うことと、はっきり整合的であるような唯一のモノ化の種類は、代替可能なものとしてあつかうことのみであるように思われ、これは、他の自律的な行為者と代替可能なものとして扱うという意味に限定されている。このことはホリングハウストの事例と密接に結びついており、おそらく、リチャード・モーアの『*ゲイ・アイディアズ*』がよい例となるような、ゲイ男性の乱交指向プロミスクエイトイというイデオロギーにもむすびついていて、そうした発想では、代替可能という意味でのモノ化は、民主的平等性とリンクされている^{*17}。この点についてはあとで論じることにする。毀損可能なもの、境界統合性をもたないものとして扱うこともまたは、自律的なものとして扱うことと整合的であるかもしれず、これは同意のあるサドマゾヒズムの弁護者たちが熱心に主張することだ。たとえば、レズビアン・ゲイ作家のゲイル・ルービンやリチャード・モーアは事実そうであると主張している。同様の主張は保守派の政治哲学者ロジャー・スクルトンによって、雄弁かつ驚きに満ちた論証によって弁護されている^{*18}。（スクルトンの分析全体は、この問題について考えてみたい人にとって非常に多くのものを与えてくれるもので、人をセックスパートナーとしてあつかうことに含まれている道徳的問題をさぐる哲学的挑戦とし

^{*17}Richard D. Mohr, *Gay Ideas: Outing and Other Controversies* (Boston: Beacon Press, 1992), especially the essay "‘Knights, Young Men, Boys’: Masculine Worlds and Democratic Values," pp. 129-218.

^{*18}See Rubin, "Thinking Sex," in *The Lesbian and Gay Studies Reader*, ed. H. Abelove et al. (New York: Routledge, 1993); Mohr, "‘Knights, Young Men,'" cited above. See Scruton's *Sexual Desire: A Moral Philosophy of the Erotic* (New York: The Free Press, 1986).

て、もっとも興味深いものである。)

一方で、道具性が最も道徳的に厳格な概念であるように思える点がある。我々は、多くの場面で人や物を非自律的に扱うことが許される場合を想像できる（モネの絵画、自分のペット、小さな子供たちなど）。しかし、物を単に、あるいは主に自分の目的の道具として扱うことが不適切であることもある。たとえ絵画が自律性を示さないとしても、それを道具として扱うのは不適切な態度だと私は言うのだ。他の形態の「モノとしての扱い」が道具性による扱いの決定によって排除される例がいかにか少ないかを見て取ることは興味深い。事実として、カントの表現を借りれば、何かを「それ自体を目的」として扱う決定によって、何がさらなる義務を伴うのだろうか？それは「自律性を否定しない」ということを含むが、成人した人間の非道具的な扱いにおいて自律性の尊重が必要不可欠な要素である可能性を排除するものではない。絵画の場合には「非不活性として扱わない」ということだが、成人した人間における非道具性は、行為者としての主体性の認識を伴うかもしれない。「交換可能でない」として扱わないことも、必ずしも明確ではない。私は多くの銀器をそれ自体で貴重だと見なす一方で、それらを交換可能なものと見なすこともできる。「主体性を有するもの」として扱わないことも必ずしも一般的ではない（絵画の例がそうである）。ただし、成人した人間をそれ自体の目的として扱うことが、主体性の認識を伴うことになるかもしれない。最後に、「それ自体を目的とする扱い」が不可侵性を必要とするかどうかは明確ではない。すべてはモノの性質によるようだ（たとえば、一部の実験的な芸術作品は破壊を招くような性質を持つ）。全体的に見れば、「それ自体を目的とする扱い」と「不可侵性を持つ扱い」との間には概念的な関連があるかもしれない。破壊や粉碎は通常、対象を自然な発展を否定し、場合によってはその存在を脅かす形で自己の目的に従って使用することを意味するからだ。

植物や他の動物に対する扱いに関するモノ化の興味深い問題は一旦脇に置き、人間が人間をどのように扱うかに関するいくつかの事例に移ることにする。ここでは性的な領域を避け、まず親子の関係について考えよう。親が幼い子供を扱う際、ほとんどの場合、自律性の否定が含まれており、所有の側面が存在するが、それがすべてではない。一方で、ほぼすべての時代や場所で、親が子供を身体的な完全性を欠いた存在として扱うことは悪いとされてきた。暴力や性的虐待は存在するものの、概ね普遍的に非難されている。また、子供が無活動な存在として扱われることはほとんど見られない。しかし一方で、子供が親の目的のために使われる道具として扱われたり、感情が考慮されない存在として扱われたり、さらには交換可能な存在として扱われる^{*19}程度は、時代や地域によって大きく異なってきた。現代アメリカの子育ての考え方では、これら三つの形態のモノ化をすべて重大な道徳的誤りと見なすが、他の時代や地域では必ずしもそのようには見なされてこなかった。

次に、資本主義のもとでの労働者のモノのような扱いに関するマルクスの説明を考えてみよう（その真実性の問題はひとまず置いておく）^{*20}。自律性の欠如はこの分析において非常に重要であり、道具性や労働者の経験や感情への無関心も同様である（ただし、マルクスは労働者が完全に道具や動物として見なされているわけ

^{*19}興味深い意味において、子どもへの無条件の愛という規範は、個々の特性を無視する愛をもたらす可能性があり、これが親の愛の良い側面と見なされることもある。Gregory Vlastos, "The Individual as Object of Love in Plato," in *Platonic Studies* (Princeton: Princeton University Press, 1973) を見よ。

^{*20}マッキノンがこの説明と彼女のフェミニズム的なモノ化の見解との関係について述べているのは、『フェミニズム理論』(p. 124; cf. pp. 138-39) においてである。この議論から、マッキノンが「モノ化」という用語を、マルクスの『資本論』における「Versachlichung」や「Verdinglichung」の言葉に対応させて用いており、「Entäußerung」と密接に関連し、通常「疎外」と訳される「Entfremdung」とも結びついていることが明らかである。マッキノンは、マルクスの議論——私的所有における自己の「実現」が実際には自己の疎外の一形態であるという主張——を説明し、所有において「疎外は社会的に依存する歪みである」と述べる。一方で、現在の性の実現において、女性のモノ化は単なる疎外であると述べている。「... 客体の観点からすれば、女性はモノ化を作り出してきたのではなく、モノ化そのものだった。」

ではなく、まだ人間性のある程度認識されていると述べているようだ)*²¹。労働者は他の健康な労働者や時には機械とほぼ完全に交換可能な存在として扱われている。しかし、労働者は無活動な存在として扱われているわけではない。資本主義的生産者にとって、労働者の価値はまさにその活動にあるからだ。また、マルクスが資本主義の他の欠点を指摘していても、労働者が物理的に侵害されているとは考えていない。労働者の身体的安全は名目上は保護されており、もちろん実際には十分に保護されていないが、劣悪な生活条件による健康の漸進的な悪化は一種の緩やかな身体的侵害と見なされるかもしれない。精神的な侵害は、労働者が人間としての自己定義の中心となる手段を奪われることで、マルクスが労働者に対して起きていると考える問題の核心にある。最後に、労働者は厳密に言えば所有されてはいないし、奴隷とは明らかに異なるが、非常に深い意味での「所有」の関係が存在する。すなわち、労働者にとって最も自分自身のもの、つまり労働の産物が最も奪われるものであるという点だ。マッキノンには、「性はフェミニズムにとって労働がマルクス主義にとっての位置を占める」と述べている。それぞれの理論において、自分自身にとって最も大切なものが奪われていると見なされる点である*²²。この類似性を、性的領域に入る際には忘れずにおくべきだ。

次に奴隷制について考えてみよう。奴隷制は所有の一形態として定義される。この所有形態は自律性の否定を伴い、奴隷を所有者の目的の単なる道具として利用することを意味する（アリストテレスは奴隷を「生ける道具」と定義している）。これは制度上の事実であり、たとえ時折、奴隷と主人の間に非道具的な友情が存在する場合があるとしても（アリストテレス自身も認めるように）、その事実によって否定されるものではない（アリストテレスによれば、その場合の友情は奴隷としてではなく、人間としての奴隷との友情である*²³）。では、なぜ絵画や観葉植物、ペットに関しては、所有として扱うことが道具として扱うことを必ずしも意味しないと述べたのに対して、奴隷の場合には異なるのか？私は、奴隷制に関わる所有の種類と、奴隷の人間性との関係に起因していると考え。一度人間を買いや売りが可能な物として扱う場合、その人間を自己の目的の道具として扱っていることになる。おそらく、成人した人間に対する非道具的な扱いが自律性の認識を伴う必要があるのに対し、絵画や植物の場合にはそうではないという点に起因している。また、所有という概念そのものが自律性と両立しないからである。

一方で、奴隷は決して無活動な存在として扱われているわけではなく、むしろその逆である。また、必ずしも交換可能な存在として扱われているわけではなく、特定の任務に特化されることもある。しかし、制度に内在する道具のような扱いは、ある種の交換可能性を伴う。つまり、人間が特定の仕事を体の一部の集合体に還元され、それに基づいて他の類似する体や機械によって置き換えられる可能性があるという意味での交換可能性である。奴隷は必ずしも身体的に侵害されるべき存在とは見なされないかもしれないし、奴隷の強姦や身体的虐待を禁じる法律が存在する場合もある。しかし、制度に内在する人を物として扱う姿勢が、しばしば奴隷の体を自分の好きなように使用する権利を持つという感覚につながるのには容易に理解できる。一度道具として扱い、自律性を否定するならば、強姦や暴力がなぜ悪いのかを説明することは難しくなる。せいぜい、そ

*²¹マルクスが、労働者の状況と奴隷の状況との違いを過小評価しているかもしれないという疑問は確かに浮かぶ。労働者の状況は、少なくとも何らかの同意を伴う契約に基づいており、奴隷の状況は一切の同意を欠いている。このように微妙な差異を無視して関係を同一視する傾向は、マッキノンとドウォーキンが異なる種類の性的関係を区別せずに扱う傾向と密接に関連している。

*²²MacKinnon, *Feminism Unmodified* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1987), p. 48. See also *Feminist Theory*, pp. 124,138-39. マッキノンは、マルクスが労働者が自身の「自己性」を彼が生み出す「製品や関係性」に投入し、これらの製品に「具現化される」ことを意味していると理解している。このように読まれると、マルクスの考えは、プラトンの『饗宴』におけるディオティマの考え——人間が自身のアイデンティティを拡張し、長く持続させるようなものを生み出そうとする—の一種のバージョンである。

*²³これもまた、私は奴隷に対する解放という報酬としての動機づけをこのように捉える。これは、制度の一部として提供されるのではなく、奴隷を人間として見なした上で与えられる動機づけである。他の勤労のための動機づけは、自律的な行為や目的の認識を伴うものではない。

れが道具としての効率を低下させるという意味においてのみ正当化されるかもしれない。最後に、奴隷が必ずしも主体性を否定されるわけではない。彼らをその境遇に適した精神を持つ存在として想像することもあり、彼らの喜びや苦痛についてある程度の共感を持って考えることもある。しかし一方で、人を自己目的としてではなく単なる道具として扱うという決定自体が、想像力の欠如につながりやすい。そうすることで、通常は道徳が促すような質問——「もし私が X を行ったら、この人はどのように感じるだろうか?」「この人が望むことは何か、そして私が X を行うことがそれらの望みにどのように影響を与えるのか?」——を尋ねることが極めて難しくなるのである。

この例は、マッキノン/ドウォーキンによる性に関する分析の準備をするものである。というのも、この例は、ある種の道具的な人間の扱いが、人格として本来有する自律性を否定し、モノ化する者の目には、その人間性を剥奪された人が他の虐待に対しても脆弱になることを示しているからである。たとえば、主体性の否定に伴う想像力の欠如^{*24}、交換可能性に伴う個別性の否定、さらには身体的および精神的な侵害や虐待でさえも、モノ化する者の意思や目的に最も合致すると思われる場合に生じ得るということである。この例から得られる教訓は、人間を道具化することには特に問題があるということだ。それは、人間にとって根本的なもの、すなわち「それ自体を目的とする存在」としての地位を否定することである。この一つの否定から、他のモノ化の形態が論理的に必然ではないものの、それに続いて起こるように思われる。

しかしながら、道具化がすべての文脈で問題になるわけではないことに注意しなければならない。たとえば、恋人とベッドでくつろいでいて、彼の腹部を枕にしている場合^{*25}、彼の同意が得られている（あるいは彼が寝ている場合でも、気にしないだろうという合理的な確信がある）限り、また彼に痛みを与えない限り、これは何も問題ないように思える。さらに、この行為が彼を単なる枕としてではなく、より多面的に扱う関係性の中で行われているのであればなおさらである^{*26}。このことは、問題となるのは道具化そのものではなく、人を主に、あるいは単に道具として扱うことであることを示唆している。したがって、関係性の全体的な文脈が根本的な要素となる。この点については後で再び触れることにする。

II. カント、ドウォーキン、そしてマッキノン

この概念の地形がどれほど滑りやすく、多面的であるかが見えてきた。そして、マッキノンとドウォーキンの分析の核心的な考えに近づきつつあると思われる。バーバラ・ハーマンがある注目すべき論文^{*27}で主張しているように、この核心的な概念はカント主義的である。カントの性と結婚に関する分析の中心には、性的欲望が人を物のように扱うことを導く非常に強力な力であるという考えがある。これは、何よりもまず人を自己目的としてではなく、自分の欲望を満たすための手段や道具として扱うことを意味する^{*28}。このような人の道具化は、カントの見解では、自律性の否定と密接に関連している——つまり、自分の満足を確保するために他者の行動を指示しようとする欲望である——また、主体性の否定とも結びついている——他者がどのように

^{*24}ただし、再び述べるが、特定の種類の人間の道具的な使用には、主観的な体験に対する鋭い注意が伴うことがあるかもしれない。

^{*25}I owe this example to Lawrence Lessig.

^{*26}これをさらに具体化する一つの方法は、彼を枕として使用することが、彼が自己の幸福と結びつけている重要な能力を達成したり、それに基づいて行動したりすることをどの程度妨げているのかを問うことである。私は彼が食事をするために起きることを妨げているのか？睡眠を妨げているのか？歩き回ることを妨げているのか？本を読むことを妨げているのか？など、さまざまな観点から考えることができる。

^{*27}27

^{*28}『倫理学講義』を参照されたい。特にハーマンによって引用された次の箇所(55頁):「[性的愛は] それ自体で人間の本性の墮落である。なぜなら、人が他者の欲望の対象となった瞬間、すべての道徳的関係の動機が機能を失い、他者の欲望の対象となることで人はモノとなり、誰からもそのように扱われ、利用されることが可能となるからである。」

考え、感じているのかを問いかけるのをやめてしまい、自分の満足の確保に没頭するということだ。カントが興味を持っていたのはこれら三つの概念であるようだ。無活動性、交換可能性、所有、さらには侵害可能性には興味を示さなかったように見えるが、カントが描写する道具化が、奴隷のケースと同様に、他者の身体を自分の快楽を確保するために侵害したり虐待したりする見解につながる可能性があるのは容易に理解できる。実際に、ドウォーキンがカントの後を追う際には、この関連を指摘し、性虐待やサディスティックな暴力の蔓延を自律性と自己目的的地位の否定という初期行為に結びつけている^{*29}。

なぜカントはセックスがこのようなことを引き起こすと考えるのだろうか。彼の論点は決して明確ではないが、これを詳しく説明してみよう。カントの考えは次のようになるように思われる。性的欲望と性的快楽は人の体に非常に鋭い形で感覚を引き起こす。そして、これらの感覚は、しばらくのあいだ、すべての他の考え、特に人格に対する道徳的態度に特徴的な、人間性の尊重を伴う考えを追い出してしまう。どうやら彼は、それらが性行為におけるパートナーの快楽や体験といった目的的な配慮をすべて排除してしまい、自分自身の身体状態にのみ注意を集中させると考えているようだ。このような心の状態においては、他者を自分の利益の道具、すなわち快楽のための有用な身体の部分の集合体としか見なすことができない。そして、自分の性的満足を確保しようとする強い衝動が、性的行為が終了するまで道具化（そしてそれによる自律性と主体性の否定）が継続することを保証するという。さらに、両者が性的満足に強い関心を持つため、互いにこのようなモノのような扱いを自ら許し、むしろ進んで自分を非人間化することで相手を非人間化することに積極的になるという考えもある^{*30}。カントはこれを性の一般的な特徴として見ており、男性の性に特有のものとは考えていない。また、彼はこの分析を社会的な階層やエロティックな欲望の非対称的な社会的形成に関連づけてはいないようだ。典型的な性行為においては、両者がモノ化することもモノ化されることも熱望していると考えているようである。

マッキノンとドウォーキンは、ある意味ではカントに従いながら、非常に重要な点で彼から離れる。彼らもまた、すべての人間は尊重されるべきであり、この尊重は人を道具として扱うこと、そして自律性や主体性を否定することと両立しないという考えから出発する^{*31}。しかし、カントとは異なり、彼らはこれらの否定が性的欲望そのものに内在するとは考えない。性的欲望がこれらの問題を回避する方法について、マッキノンとドウォーキンはあまり多くを語っていないが、ドウォーキンの小説の中のより露骨なエロティックな部分は、性において互いに自律性を良い形で一時的に放棄し（相手への受容性と感受性を高める形で）、道具化せず、相手のニーズに無関心になることなく、両者が満足する融合的な快楽を目指すことが可能であることを示唆している。ドウォーキンがローレンスに多大な影響を受けていることは明らかであり、この問題については後で彼を論じる際に再び触れることにする。さらに、『インターコース』におけるジェームズ・ボールドウィンについて

^{*29} 『インターコース』（ニューヨーク：フリー・プレス、1987年）の122-123頁を参照されたい。「文化においても経験においても、性交というものが、女性が通常の利用する方法であり、それによって彼女の人間としての潜在的 가능성이肯定されるものであり、それと同時に、侵害的な虐待でもあり、彼女のプライバシーが取り返しのつかない形で損なわれ、その女性の「自己」が不可逆的かつ回復不可能な形で変化するという深い認識が存在する……。定義上、彼女は減じられたプライバシー、減じられた身体統合性、減じられた自己意識を持つとされる。なぜなら、彼女の身体は物理的に占有され、その占有の中で支配されるからである。」

^{*30} こうして、カントにとって性行為は、相互の尊重という全体的な文脈の中で相手を手段として利用できる契約関係のようなものではない。彼の分析によれば、性的欲望は尊重の可能性をすべて排除してしまうためである。このことは結婚においても同様である（下記参照）。ただし法的な文脈によって、少なくとも二人の関係の他の部分では尊重が存在することが保証されている。

^{*31} カント的な例として、ドウォーキンの『インターコース』（140-141頁）を参照。「特にモノの地位を受け入れることによって、彼女の人間性が傷つけられる。それは、暗黙のうちに、より少ない自由、より少ないプライバシー、より少ない統合性を受け入れることである。彼が彼女をモノ化し、彼が彼女をファックするために、彼が彼女をモノ化するときに、彼女は彼の支配に対して政治的な協力を始めている。そして、彼が彼女の中に入るとき、彼は自分自身と彼女に対して、彼女が何であるかを確認するのだ。つまり、彼女は「誰か」ではなく「なにか」である、と。ましてや対等な誰かではないことを確認するのだ。」

での議論で^{*32}、ドウォーキンが同性愛の男性の性行為が、現在の社会においてこれらの良い特性を示すことができると考えていることを明確にしている。問題は性的欲望そのものの鈍感さにあるのではなく、支配と支配される構造に満ちた社会で私たちがエロティックに社会化されている方法にある。男性は支配と道具化のパラダイム・シナリオと結びついた形で欲望を経験するよう学ぶ（マッキノンとドウォーキンにとってポルノがこれらのパラダイム・シナリオの主要な源とされることが、ポルノの重要性を説明している）。女性は同じパラダイム・シナリオに結びついて欲望を経験し、支配され、モノ化されることをエロティックなものとして学ぶ。こうして、マッキノンとドウォーキンにおいてモノ化は非対称的であり、一方がモノ化する者であり、他方がモノ化される地位を自ら進んで受け入れる者となる。このため、性が人間性の喪失、つまり「何か」になることであり、他者としての存在を奪われるのは女性だけであることになる。マッキノンとドウォーキンは、モノ化に無活動性^{*33}、交換可能性、所有^{*34}の要素が含まれる場合もあると示唆することがあるが、彼らが用いる概念の中心は実際には道具性であり、カント的な形で自律性と主体性の否定に結びつき、また関連する形で侵害や虐待の可能性に結びついていることが明らかである^{*35}。

カントの性的モノ化と使用の問題に対する解決策は、結婚である^{*36}。カントは、性的関係が互いの尊重と配慮を促進し、少なくとも法的に（道徳的にでなくても）保証するような制度的に構造化された関係に制限される場合のみ、モノ化が無害になると主張する。両者がさまざまな形で互いに支え合う義務を負うことで、人間性に対する一定の尊重が確保され、情熱的な性愛によっても失われることはない。ただし、この尊重や「実践的な愛」が性愛そのものを彩ったり浸透したりすることはないとカントは見ているようだ^{*37}。典型的に、カントは結婚の非対称的または階層的な性質や、所有や自律性の否定といった側面についてあまり心配していない。これらの側面は適切で当然のものであると考えており、性的モノ化がこれらの制度的な取り決めから支援を受けているとは決して示唆していない。

一方で、ドウォーキンとマッキノンにとって、問題の根源は階層的な構造にある。多くの性愛が示す尊重の欠如は、私が述べてきたように、性的なもの自体の特性ではなく、非対称的な権力構造によって生み出されるものである。結婚は、その歴史的な所有や自律性の否定に関する意味合いを持つ構造の一つであり、性を歪める要因となっている。たとえば、ドウォーキンの『マーシー』において、アンドレアと若い革命家の間での互いに満足する情熱的な性的関係が、結婚して夫婦となった途端に崩壊し、制度に支えられて彼が性的に支配を主張するようになり、関係がサディズムと虐待の恐ろしい物語へと堕ちていく。この道徳的な物語は、ドウォーキンが、制度が私たちがどれだけ善意を持っていても傷つけ、非人間的で暴力的な性的行動の形態をエロティックにするという信念を示している。この状態に対する解決策として提案されるのは、単一の制度ではなく、男性が権力をエロティックに感じるようにするすべての制度的構造を徐々に解体することである。この

^{*32}Pp. 47-61.

^{*33}See, for example, MacKinnon, *Feminist Theory*, p. 124: 「女性は自然であり、物質であり、社会世界で自己を具現化しようとする行為主体によって従属させられる存在であった」；また、p. 198には「女性に許されている行為は、行為されることを求めることである」と記されている。

^{*34}例えば、交換可能性や所有権は、マッキノンが男性を「消費者」、女性を「性的使用の対象」として記述している点において暗黙的に示されている（同書、pp. 138-139）。

^{*35}サリー・ハスランガーによる「On Being Objective and Being Objectified」（『A Mind of One's Own』 pp. 85-125）におけるマッキノンの思想についての説得力のある議論を参照されたい。特に、ハスランガーは、マッキノンのモノ化の概念の核心には道具性があると主張している点で重要である（p. iii）。

^{*36}ハーマンの優れた議論（62-63頁）を参照されたい。「これらの規則は、行動を制約したり義務付けたりするためのものというよりも、道徳的な配慮を構築するためのものである。つまり、それらは他者に対する性的関心が、その人の人生に対する確固たる道徳的配慮がある場合のみ可能となるようにし、そのために、その人の福祉に関する義務を受け入れることを性的活動の条件とするのである。」

^{*37}マッキノン『*Feminist Theory*』 pp. 138-139を参照せよ：「…モノ化そのものが、自らの自己決定を陶酔的に放棄する形で、女性の性的欲望と魅力の明らかな内容となっている。」

ようにして、性的嫌がらせ、家庭内暴力、そしてポルノの批判は、カント主義的な道徳的/政治的改革の一つのプログラムとして結びついている。

モノ化の概念のさまざまな側面を整理しないことは、マッキノンとドウォーキン批判に時折曖昧さをもたらす。たとえば、ドウォーキンによる『O嬢の物語』の分析から次の一節を考えてみよう。

Oは完全に所有されている。それはつまり、彼女が自分自身の移動をコントロールすることができず、個性を主張することができない物体であることを意味する。彼女の身体は、鉛筆が鉛筆であり、バケツがバケツであるのと同じように、ただの身体である。ゲルトロード・スタインが皮肉を込めて言ったように、バラはバラである。それはまた、Oの女性として、女性としてのエネルギーや力が吸収されていることを意味する……Oの性器を貫くサー・スティーブンの名前と紋章のついたリングや、尻に刻まれた焼き印は、正しい場所に置かれた永続的な結婚指輪である。これらは、所有された物として彼女を刻印し、成熟や自由への移行を象徴するものではまったくくない。これは従来の結婚指輪にも言えることだろう*³⁸。

ここでは、自律性の否定が道具化と混ざり合っている中で、無活動性、交換可能性、所有がほぼ不可避の結果として扱われているように見える。確かに、小説がこれらの結びつきを描き、サー・スティーブンがOを所有する特定の手法が、能動的な主体性や質的な個性、または非所有性と両立しないのは事実かもしれない。しかし、これらの概念は論理的には独立したものであることを強調することが重要である。愛する子供に対して自律性を否定しても、これら他の結果が必ずしも生じるわけではない。したがって、我々が知りたいのは、ここでどのようにそれらが結びついているのかという点である。典型的な男性が女性を非自律的な存在として扱うことが、なぜ他の結果をもたらすのか、どのようなメカニズムが働いているのかを理解する必要がある。ドウォーキンにとって、『O嬢の物語』が文化において広く見られる関係性のパターンの典型であると考えられることは、結婚指輪の言及が示すように明白である。制度的および/または道徳的な変革を考える際には、これらの結びつきを明確に理解する必要があり、どこから変革を始めるべきかの手がかりを得ることができるはずだ。

これらの概念の異なる側面を結びつけるものは、男性が女性の自律性を否定する背後にあるとされる、ある種の特定の道具化と使用のモードだと考える。サー・スティーブンにとって、O嬢は彼の快楽を満たすための道具としてしか存在しない（そして、ドウォーキンが鋭く指摘するように、彼が愛しているが物理的に近づけない男性であるルネの代理としても）。それ以外では、O嬢は「ゼロ」であり、何者でもない。彼女は、たとえば愛される子供のように、自律性を否定されながらも個性や主体性を保つ存在ではない。彼女はただ一連の身体的な部位、特に挿入されて使われる膣と肛門に過ぎず*³⁹、それを超える重要なものは何も持たず、それらの部位にさえ個性や主体性がない。このようにして、ドウォーキン（時にはマッキノンも）は、道具化と自律性の否定という核心的な概念から、モノ化の他の側面への更なるステップを踏み出しているのだと考える。彼らは、これらの結びつきが遍在していると信じている。これが男性支配のもとで女性がすべてであると示唆している。しかし、これらの結びつきが必ずしも概念的に厳密でないことに気づくと、実際にはどれほど広範に存在するのかを問う必要が生じる。また、女性と男性がこれらの特徴をどのように組み合わせる生活の中で展開し、たとえば受動性を道具化から切り離したり、交換可能性を自律性の否定から切り離したりできるかを問う必要も出てくる。

*³⁸ Andrea Dworkin, *Woman Hating* (New York: E. P. Dutton, 1974), pp. 58, 62.

*³⁹ ドウォーキンは、小説において肛門性交が頻繁に描かれることを指摘し、それがOがルネの代理であることの証拠だと述べている。

III. セックスライフのワンダフルな部分？

元の箇所に戻る前に、一つの基本的な点に注意しなければならない。モノ化においては、文脈がすべてである。マッキノンとドウォーキンもこれを認めており、男女関係を女性の従属の歴史的背景と社会的文脈を踏まえて評価する必要があるとし、これらの文脈におけるモノ化の意味を男性間や女性間の関係での意味とは区別すべきだと主張する。しかし、彼らは個々の歴史や心理に深く踏み込むことは少ない（実際、文学作品を評価するには全体的な作品の文脈を参照することを通常拒否し、物語に関わる場合でも文脈を無関係とする傾向がある*40）。彼らが政治運動に関わっているために、文脈の細部にあまり興味がないという側面もあるが、一方で私たちにとってはこれが重要である。というのも、多くの場合、いやすべての場合と言ってもよいが、モノ化の問題ある使用と無害な使用の違いは、その人間関係の全体的な文脈によって決まると主張するからである。

このことは簡単な例を考えるとすぐにわかる。W という女性が重要な面接のために町を出ようとしているところに、M という知人が「本当に行く必要はないよ。写真を送ればいいじゃないか」と言ったとする。M が W の親しい友人でなければ、この発言はほぼ確実に侮辱的でモノ化するようなものと受け取られる。これは W を身体的（顔を含む）な部分に還元し、彼女の職業的成果や他の個人的属性を軽視していることを示している。この発言は確実に W の自律性を軽んじているように見え、彼女を写真で十分に表される無活動な存在として扱っている。また、ある程度の交換可能性を暗示する可能性もある。文脈次第では、道具化を示唆することもあるかもしれない。つまり、W が男性の視線を楽しむためのモノとして扱われている可能性があるということだ。さて、もし M が W の恋人であり、ベッドでこの発言をしたとしたらどうだろうか。状況は変わるが、まだ不明な点が多すぎて判断できない。面接が何のためのものか（モデルの仕事か？教授職か？）も分からないし、彼らの関係性についても十分な情報がない。もし M が通常から彼女の業績を軽んじているなら、この発言は見知らぬ人による同じ発言よりもさらに悪質で、道具化を示唆する度合いも深い。一方で、二人の間に深い相互尊重があるならば、彼が単に彼女がどれほど魅力的かを伝えたい、あるいは彼女に町を離れてほしくないと伝えただけだとすれば、話はかなり異なってくる。とはいえ、こういった発言は社会的な背景が関係するすべての関係性において、W が M に同じことを言うよりもリスクが高いかもしれない。それでも、この発言が必ずしも削減的なものでないと感じることがある。つまり、W の外見に対する称賛が彼女から何かを奪うのではなく、むしろ何かを付け加えるように思われる場合がある（多くは声のトーンや身振り、ユーモアのセンスに依存する）。最後に、親しい友人が W に同じ発言をした場合を考えてみよう。この友人が彼女の業績を尊重しており、友情に関連するすべての面で自分に対する態度に大きな信頼を寄せていることを W が知っているが、W はたまには自分の身体を気にかけてほしいと感じている。この場合、モノ化的な発言は W にとって思いがけない喜びであり、歓迎される称賛を伴ったジョークとして受け取られるかもしれない。この面接が何のためのものか、W の能力とどのように関連しているのかをまだ把握する必要があるとしても（また、現代の社会の状況を考えれば、このような発言が W から M にされることが非常に稀であるという事実についても考えるべきだが）、この発言が何かを付け加えるものであり、何かを奪うものではないように感じられる場合もあることは否定できない。もちろん、W がこのように反応するのは、自己の従属をエロ

*40 例えば、マッキノンの *Feminist Theory* (202) を参照されたい。「全体として」のテストが『プレイボーイ』のような出版物を正当化すると批判している。「……正当な場面は、そこに文脈化される女性の矮小化やモノ化がもたらすとされる被害を軽減する。加えて、もし女性が被害を受けるのであれば、その作品が他の価値を持つことに何の意味があるのか。おそらく、男性の間でその作品の価値を高めることが、女性に対する被害を増大させるのかもしれない。」

ティックなものとして捉えているためかもしれないという主張もあるが、このような「偽の意識」に関する主張は、判断が難しい。それでも、すべてのケースがこのようなものだと考えるのは無理があるように思える。このような人間の複雑さに対して、ドウォーキンとマッキノンとはしばしば十分な感受性を持っていないように感じられる。

それでは、これらの箇所を見てみよう。ロレンスはここで、そしてしばしば、自律性の喜んでの放棄や、ある意味での主体性の放棄に焦点を当てている。彼の見解では、性的な力は、両者が意識的な選択や内的な自己意識、思考を脇に置き、ある意味で物のように、自然の力同士が会うような形で「血の知識」をもって相互に交わるときに、最も本格的に体験される。こうして、ブランウェンは彼の血が高まり、熟考が消え去り、「盲目で破壊された」ように感じる。その瞬間、彼の妻は彼にとって神秘的な物体的な存在として現れ、印象的な比喩「燃え上がる暗闇の核」として描かれる（これは、性的な照らしが知性をまず盲目にする必要があることを示している）。この物体的な存在は彼を呼び寄せるが、それは道具的な使用への招きではなく、自己の人格の放棄、一種の自己完結性や自己充足の否定へと導くものである。このようなモノ化は、両者の自律性と主観的な自己意識の相互的な否定に根ざしている。そして、それは受動性や受容性として理解される無活動性とも結びついている。なぜなら、両者が血の力の前に自己の主体性を放棄するからである。また、交換可能性とも関連がある。ある意味で、リディアの日常的な質的個性は彼の欲望の前で消え去り、彼女が原始的な何かの具現化となるからであり、彼自身も暗い存在に呼び寄せられる前に日常的な自己定義や個性を脇に置く。そして、侵害可能性ともつながりがある。欲望の勢いの中で、彼はもはや彼女から明確に個別化された存在とは感じず、自身の境界が曖昧になり、「個人として破壊され、焼き尽くされたい」という欲望を感じる*41。ロレンスは（ショーペンハウアーの影響を受けて）情熱の支配と境界の喪失、ショーペンハウアーが「個体化の原理」と呼ぶものの喪失との関連性を見ている。

これらすべてはモノ化である。そして、ロレンスの文章や彼の考えが好みに合うかどうかは別として、少なくともいくつかの性的経験の深い側面を捉えていることは否定できないだろう。（先に述べたように、この性的な考え方がアンドレア・ドウォーキンの小説を活気づけており、彼女が性差別を憎む理由もこの素晴らしい可能性を破壊することにある。）サンスタインの発言に対して「モノ化が性的生活の素晴らしい部分である」と議論できる意味を持たせるとすれば、このような観点から始めることができるかもしれない。実際、ショーペンハウアーと共に、それが性的生活の必要な特徴であると主張することさえ可能かもしれないが、ロレンスは、このような自己制御の放棄が普遍的なものではなく、むしろ稀であると示している点で、より説得力のある主張をしているように思える。特に自己意識的な孤立や感情の抑圧が強い文化においては、それがさらに顕著である。

ロレンス的なモノ化はしばしば、ある種の身体の部分への人間の還元や、これらの身体部分に独自の主体性を与えることと関連していることは注目に値する。『チャタレー夫人の恋人』の次の場面を考えてみよう。

「見せて……！」彼はシャツを脱ぎ捨ててじっと立ち、彼女の方を見つめた。低い窓から差し込む太陽の光が、彼の太ももと細い腹部を照らし、濃い色合いで熱を帯びたように見える勃起した男根が、鮮やかな金赤の毛の小さな雲から立ち上っていた。彼女は驚き、恐怖を感じた。「なんて奇妙なの！」と彼女はゆっくりと言った。「なんて不思議な存在なんだ！こんなに大きくて、こんなに暗くて、自信満々なんだね！彼はこんな感じなんだね？」男は細い白い体の前を見下ろして笑った。スリムな胸の間の毛

*41 この特定の事例において、それは壊されたり打ち砕かれたりすることへの意欲とは直接的に結びついていないように見えるが、この種の境界の放棄と、少なくとも一部のサディスティック・マゾヒスティックな関係における境界の放棄との間に密接なつながりがあることを見て取るべきだと思う。

は暗く、ほぼ黒かった。しかし腹の根元、男根が太く弧を描いて立ち上る部分では、金赤で鮮やかに小さな雲のように生えていた。「なんて誇らしげなんだ！」彼女は不安げに囁いた。「そしてなんて堂々としているの！だからこそ男たちはあんなにも威圧的なんだと分かった。でも本当に美しい、まるで別の存在のよう！少し恐ろしいけれど、でも本当に美しい！そして彼は私の方に来るんだ——」彼女は恐れと興奮で下唇を噛んだ。男は沈黙の中で自分の緊張した男根を見下ろし、それが変わることはなかった。「欲しいんだな、女陰が欲しいって言え。レディ・ジェーンに伝えな、女陰が欲しいって。ジョン・トーマスと、レディ・ジェーンの女陰だ！」「ああ、彼をからかわないで」とコンスタンスは言い、ベッドの上で膝をついて彼の方へ這い寄り、白くスリムな腰を腕で抱き寄せ、揺れる乳房が勃起した男根の先端に触れ、滴りを受け取った。彼女は男をしっかりと抱きしめた。

この場面では、両者が自分の個性を脇に置き、身体の器官と同一化される感覚がある。彼らは互いをその器官を通じて見ている。しかし、カントが示唆するように、このような身体の一部に焦点を当てる行為が人間性の否定であるという考えは、全く間違っているように思える。また、互いを身体の一部に還元しているという主張も、先の写真に関する例と同様に、誤りであると感じる。このように身体の部分に対して強い集中が行われることは、むしろ付加であり、削減ではない。コンスタンスにとって恐怖や男性の力に圧倒される恐れを伴う情熱の場面が、メラーズによってユーモアと情熱を結びつけて行われることで、モノ化そのものが無害で愛情に満ち、解放的なものとして描かれているのだ。

ロレンス的なモノ化が無害であるとすれば、なぜそうなのか。何よりもまず、道具化が完全に欠如していること、そしてそのモノ化が対称的であり相互的であるという事実を指摘しなければならない。さらに、これらは相互の尊重とおおまかな社会的平等の文脈で行われている^{*42}。自律性、さらには主体性や行為性の放棄は、イギリスの尊厳という牢獄の中で勝利を伴う喜ばしい達成となっている。この放棄は、自己意識の牢獄からの解放を成し遂げるものであり、ロレンスの非常に納得のいく見解によれば、私たちが互いから隔絶させ、真のコミュニケーションや受容を妨げるものだ。このような他者をこれほどまでに近くに受け入れる意志の中に、コンスタンスが認識しているように支配や圧倒の危険が常に存在する一方で、膨大な信頼が見られる。このような信頼は、少なくとも何らかの相互尊重と配慮がなければ不可能な関係であると考えられるだろう。しかし、ロレンスが描くさまざまなより複雑で苦しみを伴う男女関係において、この点が一筋縄ではいかないことも明らかである。性における自律性の喪失がある場合でも、その文脈は全体的に見て自律性が尊重され促進される場であり得る。コンスタンスの場合のように、性的関係の成功が広範にわたる幸福と自由の実現に影響を与えることがある。また、性愛の瞬間における主体性の喪失があっても、それはしばしば、他の瞬間においてパートナーの主体性に対する強い配慮を伴うことがある。愛する人がその人の気分や願望に強く関心を持ち、その状態が自分にとっても重要な意味を持つためである。ブランウェンが妻の変動する気分执着する様子は、この点を非常に明確に示している。

最後に、人を身体の一部と同一視する際に見られるような表面的な交換可能性が、必ずしも非人間化を意味するわけではなく、むしろその人の個性への強い配慮と共存することができるということが分かる。これは、メラーズとコンスタンスのやり取りのように、身体の器官自体を個別化し、個性化する形で表現され得る。お互いの性器に名前を付けることは、彼らが特別で個別的方法で互いに欲望を抱いていること、つまりメラーズの性意図が交換不可能であることを示す手段である^{*43}。これは、メラーズがコンスタンスに伝えようとする

^{*42}ここで言いたいのは、当時のイギリスにおいて、労働者階級の男性が上流階級の女性とおおよそ同等の社会的権力を持っているということである。ブランウェンとその妻に関しては、彼女の upper class の出自や財産が、彼とおおよそ同等の立場を与えているということだ。

^{*43}この点は、「ジョン・トーマス」がペニスの伝統的な名称であり、メラーズによるオリジナルなものではないという事実によってわず

ることであり（そしてマッキノンとドウォーキンが時折認識していないように思われることである）、性器と同一視されることが必ずしも非人間的な肉塊としての犠牲や虐待を意味するわけではなく、むしろ彼女が人間として完全に見られるための一つの方法であるということだ。それは、人の性器が実際には交換可能なものではなく、独自の個性を持っており、恥じることなくじっくりと見つめるならば、それらが人間の一部分であるということ思い出させるものである^{*44}。

ここでカントについて非常に興味深いことに気づくことができる。彼は、性器に焦点を当てるのが人間性の軽視を伴うと考えているようで、それはおそらく、人間性や個性が性器には存在せず、それらは単なる交換可能な非人間的なもの、道具のようなものにすぎないと信じているからだ。これに対し、ロレンスはこのような反応こそが私たちが非人間化すると述べており、性器は私たちの人間性や個性の重要な一部であり、それを動物的なものに還元することは間違いだとする。お互いの性器を正しい名前と呼ぶことを学ぶことこそ、互いを人間として完全に尊重するための第一歩となるというのがロレンスの見解である。

ロレンスを考えることで、マッキノンとドウォーキンが提示する性の歪みに関する見解を問いただすことができる。ロレンスは、イギリスにおける女性の不平等や、ある意味での非人間化が、女性のエロティックな可能性の否定に基づき、そこから力を得ていると示唆する。女性が無性の存在として見られ、性器と結びつけられることが拒まれることが問題だと指摘する。現代のフェミニストであるオードリー・ロードのように^{*45}、ロレンスは、性的モノ化が（決して商業的なものでなく、性の商業化に真っ向から反対するもの^{*46}）女性にとって自律性と自己表現の手段となり得ること、ある種の性的行為における自律性の放棄が、自己を完全に充実したものにするためのエネルギーを解放する可能性があることを示している^{*47}。実際、メラーズはこの小説において唯一コンスタンスを自己目的的な存在として見ており、彼の非道具的な関心と、それに伴う彼女の自律性の促進は、彼の性的関心と密接に結びついている。

マッキノンとドウォーキンは、ロレンスやロードが「自然な」性的領域が文化的構築の背後に存在し、それが適切な性行為で解放されると考える点において、ある程度のナイーブさがあると主張するだろう。彼らは、性的役割や欲望が文化的に形作られる深さを過小評価しており、それゆえに性別役割の普遍的な歪みに感染していると指摘する可能性が高い。この大きな論争を判断することはこの記事の範囲を超えているが、少なくと

かに弱められる。しかし、このやり取り全体には非常に個人的な性格があり、とにかくコンスタンスにとっては初めて聞く名前であり、それが彼女にとって完全に固有の名前であることは明らかである。性器に個人の固有名を与えつつも、それがメラールの他の部分とは異なる名前であるという事実は、私が先に述べた個別性の喪失に関する点と複雑に関係している。というのも、この部分が支配権を握ることを許すことで、自分自身であることをやめるという事実を示唆しているからだ。では、コンスタンスの性器が固有名を与えられず、単に「レディ・ジェーンの性器」と呼ばれ、性と階級の緊張を冗談めかして暗示していることをどのように捉えるべきだろうか。もちろん、メラールが彼自身の性器よりも彼女の性器を個人的に扱っていないと主張することもできるだろう。しかし、もし彼が単に彼女の性器に名前を付けるならば、それは場面に不協和音をもたらすと思われる。おそらく、そのような遊びは彼女自身が関わるべきものであり、この時点で彼女は遊びに参加するにはあまりに怯えているのだ。

^{*44}この立場は、スクルトンの『性的欲望』で展開されている立場と微妙に異なると考える。スクルトンは、良い性的な出会いでは、個々の人々が互いの身体の中で出会うとし、それぞれの身体が自身の人格によって照らし出されるからだとして述べている——「他者の身体は他の自己となり、覚醒の瞬間に「私」によって照らし出される」（スクルトン、1995年4月1日付の手紙）。私が感じるころでは、スクルトンの身体に対する態度には常に、身体そのものが人間性の一部でないという感覚があり、それが一時的で神秘的な「照らし」によって変容され、ある種の救済を必要とするというものだ。一方で、私がローレンスと共有する見解は、身体は常にそのまま人間性の一部であり、変容を必要としない、あるいはむしろ、必要なのは恥じることをない注意と愛であるというものである。この違いは、動物の身体に対する我々の態度の違いに明確に表れている—この点については、1986年12月18日付の『ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス』における『性的欲望』の私の書評を参照されたい。

^{*45}Audre Lorde, “The Uses of the Erotic,” in *Sister Outsider* (Freedom, Calif.: Crossing Press, 1984), pp. 53-59.

^{*46}See also Lorde, *ibid.*, p. 54: 「エロティックなものは…混乱したものの、些細なもの…プラスチック化された感覚にさせられました。」

^{*47}*Ibid.*, p. 57: 「一度私たちが人生のあらゆる側面を深く感じ始めると、自分自身や人生の追求に対して、私たちが感じることで知っていると知っている喜びと一致するものであることを求めるようになる。」

も私の反論の方向性を示すことはできる。確かに、ロレンスの「自然」や「血の知識」に関するロマンチックなレトリックは、社会化や性的生活における認知的な意識の深さを過小評価しているという点で、ある程度のナイーブさがあるだろう。また、文化や思考から解放された性的な方が良いという彼の考えにも共感はない。しかし一方で、ある種の自己制御の放棄や感情的および身体的な受容性の価値に関する彼の主張は、これらの他の主張に依存していないと考える。また、ロレンス的な性的表現を擁護することは（実際、アンドレア・ドウォーキン自身も『マーシー』の初期章やボールドウィンに関するエッセイで行っている）、必ずしもこれらの立場を受け入れることを意味しない。この立場は、私たちの文化がより異質であり、交渉や個人的な構築の余地があることを認識するものであり、これはマッキノンとドウォーキンが通常認めるよりも幅広い可能性を示している^{*48}。

さて、モリー・ブルームに話を移そう。モリーはブレイズ・ボイルンを巨大な身体の一部の集合体として見ている。彼女はこれをユーモアと喜びをもって行いながらも、同時にボイルンの人間性の質について一定の疑念を抱いている。彼女によるボイルンのモノ化は、彼の自律性の否定や道具化・利用とはほとんど関係がなく、無活動性や所有、侵害可能性とも無縁である。むしろ、主体性の否定に関する要素に焦点を当てており（モリーは一度も彼の感情を気にせず、しばしばポルディについて考えるようにはしていない）、交換可能性も見られる（彼は単に大きなペニスであり、「冗談として付き合うにはちょうどいい」存在であり、馬や無生物のディルドーのような鉄棒とほぼ交換可能なものとして描かれている）。これは深遠なロレンス的な体験とは程遠いものである。その深みの欠如により、モリー自身にとってもやや物足りないものであり、「スプンク」という言葉を「精液」と「気骨」の両方の意味で曖昧に使うことで、彼女が身体的な喜びと、肉体的には満足できないが愛情深いポルディとの関係との重要性に関する混乱を示している。一方で、モリーが性的な身体的側面を楽しむことは（小説の慎み深い攻撃者たちによって特に衝撃的だとされたが）、ロレンスやオードリー・ロードが女性に自由に体験してほしいと願うものの一部であることも確かであり、それを不完全であるがゆえに貶めるのは誤りだと思われる。（実際、小説全体のテーマは不完全性の受容であり、ジョイスが最も強く反対するのは、モリーの喜びが地を揺るがすようなものではなかったという理由で、それを道徳的に否定するロレンス的なロマン主義だろう^{*49}。）ここでは、モノ化が性的な生活における喜ばしい部分である可能性を示す全く異なる方法が見られる——そして、このような身体の部分への神話的な集中が、むしろ日常的または必要な特徴の一つかもしれない。ただし、モリーのような滑稽な誇張はまた別の話だ。

私たちにとって特に重要なのは、モリーによるボイルンのモノ化に対する反応が文脈によってどのように条件づけられているかという点である。モリーは、誘惑の力を除けば、社会的にも個人的にもかなり無力である。彼女はまた、ボイルンが特別に彼女を高く評価していないことを認識しており——彼は他の多くの男性と同様に、彼女を性的モノとして利用している——「それが彼らが求めるすべてだから」。彼女が主体性を否定する行為には、報復的で自己防衛的な性質があり、それがボイルンがモリーについて考える場合とは異なり、ある種の正当性や正義性を伴うように感じられる。

ハンキンソンのハードコアな「小説」は、マッキノンとドウォーキンが攻撃するジャンルの典型的な例でありながら、その疑似文学的側面では非常に興味深い事例でもある。ブルームーン・プレスの顧客が虹と並べてこの作品を読む可能性は低いだろうが、ハンキンソンがロレンスから借用し、暴力と虐待の物語にロレンス的な「血の知識」や自律性の否定の要素を取り入れている様子に気づくだろう。これらの要素は、後に続く暴力を正当化する装置として機能している。ロレンス的な性表現が個別性の放棄や、境界が曖昧になることで侵害

^{*48}その意味で、この提案は故ジョン・J・ウィンクラーの著作、とりわけ『The Constraints of Desire: The Anthropology of Sex and Gender in Greece』（ニューヨーク：ラウトリッジ、1990年）に表現されている性に対する姿勢に共鳴するものである。

^{*49}See my discussion in “The Transfiguration of Everyday Life,” *Metaphilosophy* 25 (1994): 238-61.

可能性に近づく側面を伴うことを述べた。確かに、ロレンスは受け入れるために貫かれることの意欲を性的受容性の貴重な側面として描いている。したがって、ここで問題となるのは、(a) サドマゾヒスティックな性的行為が単にロレンス的な性格を持つことが可能であるのか、それともより陰湿な性格を帯びるのか、(b) ハンキンソンの物語がその無害な種類のものかどうかである。(ここでは、物語の全体構成において「暗示された作者」がどのように物語を構築しているかに焦点を当てずに登場人物やその行動について多くを語ることは難しい。なぜなら、この「小説」は極めて定型的で、複雑な性格描写に欠けているからである。)

(a) の問いに対する答えが「はい」である可能性を否定する先入観的な理由はないように思われる。私自身、この点について明確な直感を持っておらず、ここでは経験や欲望の限界を認めざるを得ないが、いくつかの物語描写では、サドマゾヒスティックな行為が同意に基づく形でロレンス的な性格を持つと見なされることが妥当であるように思われる。痛みの与えられる脆弱性に対する意欲が、快楽を超える鋭い刺激として、他の性的行為には見られないような完全な信頼と受容性を示すというものだ。パット・カリフィアの不穏な短編「ジェニー」は、そのような描写の一例である^{*50}。そして、ハンキンソンは確かにこのような位置づけで物語を展開し、二人の登場人物が個別性の喪失を求める深い相互の欲望に導かれていることを示唆している。イザベルの中から発せられるロレンス的な「原始的な声」は暴力の継続を求めており、ハンキンソンは彼女がこれを求めることで、単なる個性を超えた存在の深層に触れていると示唆している。これらはすべて、ブルームーン・プレスの装いをまとったロレンスとショーペンハウアーである。

違いを生むのは、明らかに文脈と意図である。(b) の問いに対する答えは明確に「いいえ」である。マクレイという登場人物だけでなく、ハンキンソンのテキスト全体が、女性を男性の欲望を満たすこと以外では自律性や主体性が全く考慮されない存在として描いている。女性たちは、彼女たちが示すどんな人間性の徴候も含めて、男性が望むように性的モノとして使用されるためだけに存在している。女性の無活動性、自律性の欠如、侵害可能性をエロティックにすること、そして「彼女がそれを求めている」「これは彼女にとって自然が定めたものである」といった架空の安堵を与える要素——これらすべてが、例をマッキノンの見解の教科書的な事例とし、マッキノン/ドウォーキン条例のミネアポリス版およびインディアナポリス版の典型的な候補とするものであり、ロレンスとは決定的に異なるものとなっている^{*51}。ロレンスにおいて、性器として扱われることは、自分の活動と充実の領域を広げる許可となる。ハンキンソンでは、性器のように扱われることは、体験が全く無視される存在として扱われることを意味する。この小説全体は、同様の場面の連続であり、女性の主体性を読者の目から隠し、男性の使用と支配のためのモノとして女性を構築している。恐ろしい方法で主体性が登場するのは、マクレイの欲望が「侵害し、冒瀆し、破壊すること」に向かっているためである。それは死体や動物との性交では満足できない欲望であり、性的に興奮させるのは、かすかに人間であると認識している存在を「何か」へと変える行為であり、誰かとしての存在を奪うことなのだ。そして、人間をそのように扱うことが性的に興奮するのは、それが権力のめまいを伴う体験だからである。

J.S. ミルは、イギリスで男性がどのように育てられてきたかを生々しく描写した。彼らは、女性の優れた業績や性格を日々目の当たりにしながらも、男であるだけで人類の半分よりも優れていると教えられる。この意

^{*50} "Jenny," in Pat Califia, *Macho Sluts: Lesbian Erotic Fiction* (Boston: Alyson, 1984). See also Roger Scruton, *Sexual Desire*.

^{*51} 事態を複雑にしているのは、ハンキンソンの二人のキャラクターがある意味で非常にローレンス的であるという点である。悪意をもって行動しているのはマクレイではなく、暗示された著者であり、女性に痛みや屈辱を求める主体性を付与しているように見える。では、なぜハンキンソンの事例では、同じくフィクションであると思なされるにもかかわらず、作品全体の構築に対する批判へと素早く動くのか。その答えは、ハンキンソンのテキストの定型的な性格にある。このテキストは、キャラクターを女性のセクシュアリティに関する暗示された著者の見解を表現する単なる口実として見るように誘導する。そのため、ジャンルや作者の関与についての議論を抜きにして、登場人物の行動を独立して論じることは無意味に思えるのである。

識によって、彼らは墮落してしまう^{*52}。この観点から考えると、ハンキンソンの読者がどのように教育されているかが見えてくる。ポルノが生理的に印象を残し、興奮と反応のパターンを形成するように^{*53}、読者は、自分が男性であるというだけで、人類の半分を侵害する権利があると学ぶ。そしてその半分の人間性は、ぼんやりとしか示されていない。このような作品に没入し、そこで描かれるイメージに関連した簡単に単純な満足を繰り返し得るようになると、女性に対する期待のパターンを形成する可能性が高まる——すなわち、女性は自分の快樂のために存在し、そのように扱われるべきものだというものである。作品全体がこのようなエピソードに満ちており、それを強く奨励している^{*54}。マッキノンとドウォーキンとは異なり、私はそのような作品に対して法的な制限、特に彼女たちが提案する市民条例さえ支持しない。なぜなら、そのような提案は、重要な表現の利益を危険にさらすと考えるからだ^{*55}。また、そのような作品の存在には道徳的価値もあると考えており、それを研究することで性差別について多くを学ぶことができる。しかし、私を知る若い男の子からそのような作品を取り上げることは間違いないし、それを読書リストやシラバスに含めることに抗議するだろう^{*56}——ただし、ここで推奨するような方法での読み方を除いて。また、ドウォーキンがエピグラフで述べているように、このような作品に対する倫理的批判が繰り返し行われることが、「私たちの闘争の中心にある」と考えている。

『プレイボーイ』は、より丁寧ではあるが、結局のところ本質的には似ている。この点でも、私はマッキノンとドウォーキンに賛同する。彼女たちは、ソフトコアとハードコアのポルノ業界の本質的な類似性を繰り返し強調してきた。写真やキャプションが伝えるメッセージは、「この女性が他に何をしているかに関わらず、私たちにあって彼女は性的な楽しみのためのモノである」というものだ。再び、男性読者は、事実上、自分が主体性と自律性を持つ存在であり、対する女性は彼の消費のために存在する「美味しい果実」のようなものとして提示されていることを知らされる。女性は性的欲望を満たすために存在し、彼の欲望を満たすためにある、または主にそのために存在するのだというメッセージが伝えられている^{*57}。このメッセージは、より無害に

^{*52}ミル『女性の服従』（スーザン・オキーン編、インディアナポリス：ハケット、1988年）の86-87頁：「男の子が何の功績も努力もなく、たとえ最も軽薄で空虚であったり、最も無知で鈍感であったとしても、単に男性として生まれただけで全人類の半分以上を当然のように支配する立場にあると信じて成人に至るとは、いかなるものかを考えてみよ。その中には、おそらく彼自身よりも優れた女性がいることを日々、あるいは毎時感じざるを得ない場合もあるだろう……。これが、個人としても社会的存在としても、その人間の生き方全体を歪めるものではないと想像されているのか？」

^{*53}マッキノンによるこれに関する説明については、『Feminism Unmodified』および『Only Words』内の参照を参照のこと。また、ジョシュア・コーエンによる「自由、平等、ポルノグラフィ」を、オースティン・サラトおよびトーマス・カーンズ編『法理論における正義と不正義』（アナーバー：ミシガン大学出版、1996年刊行予定）にて参照されたい。また、支配が「一人の少年が別の少年に接種される」方法について述べたミルの説明も比較すべきである（『服従』、同書内）、ただし特にエロティックな教育に明示的に言及してはいない。

^{*54}物語の中で、批判や距離を促すように文脈化されたとしても、女性の非代表的な描写が悪影響を及ぼす可能性について苦情を述べる人もいるかもしれない。このため、問題のある箇所を文脈を用いて弁護することに対して、マッキノンやドウォーキンがそれを拒否するのは明らかに誤りではない。しかし、彼らの欲望の構築に関する考え方は、作品全体が「これがすべての男女関係のあり方である、またはあり得る」という信念を促す場合、より大きな力を持つ。この女性の非代表的な描写に関する点は、モノ化の問題とは論理的に独立しており、それを超えた意味を持つ可能性がある。たとえば、ここで議論されているいかなる意味でも女性をモノ化することなく、すべての女性キャラクターを愚かであるとか、貪欲であるとか、信頼できないと描く作品に対しても同様に反対することができる。

^{*55}私のその理由は、ジョシュア・コーエンが「自由、平等、ポルノグラフィ」で示したものであり、これは本稿とともにAPA中央部会のセッションで発表され、サラトおよびカーンズ編『法理論における正義と不正義』に収録予定である。

^{*56}作品が暗に想定する読者に向けて構築する欲望のパターンの形成を、批評的な読書の文脈がどの程度阻害するかは興味深い問いである。古代ギリシャのストア派は、プラトンとは異なり、悲劇詩を「幸運の財」を過大評価することによる苦痛の道徳的警告の源として残すことを望んでいた。エピクテトスが悲劇を「愚か者に偶発的な出来事が降りかかるときに起こるもの」と定義したようにである。詩人を追放するプラトンの提案を退け、彼らは道徳的批評を通じて詩人を馴化できると考えた。果たして彼らの考えは正しかったのだろうか。See Nussbaum, "Poetry and the Passions: Two Stoic Views," in J. Brunschwig and M. Nussbaum, eds., *Passions & Perceptions* (Cambridge: Cambridge University Press), pp. 97-149.

^{*57}Alison Assiter, "Autonomy and Pornography," in *Feminist Perspectives in Philosophy*, ed. Morwenna Griffiths and Margaret Whitford (London: Macmillan, 1988), pp. 58-71 を参照せよ。彼女は、こうした限られた関係に満足を経験する

見えるかもしれない。なぜなら、『プレイボーイ』の「哲学」の一環として、女性は性的快楽のために存在する存在として描かれ、痛みを与えるモノとしてではなく、またその自律性や主体性にも一応の認識が与えられているからだ。ある意味では、ロレンスやロードが示唆するような意味で、『プレイボーイ』も女性解放の運動の一環と考えられるかもしれない。もし女性の完全な自律性と自己表現が、性的能力の抑圧と否定によって妨げられているのであれば、『プレイボーイ』の明るい解放主義的な見解はフェミニズム的と言えるかもしれない。

しかし、『プレイボーイ』におけるモノ化は、カント的な人間尊重の理想を裏切るだけでなく、おそらく特にロレンス/ロードのプログラムをも裏切るものである。『プレイボーイ』は、徹底的な交換可能性と性パートナーの商品化を描き、その過程で性を自己表現や感情との深い結びつきから切り離してしまう。ロードは、この非人間化と性的商品化が、実は古いピューリタニズムの現代的な顔であり、そのような出版物の見せかけのフェミニズムが、実際には女性の本物の情熱に対する深い抑圧的な態度の仮面であると主張している^{*58}。『プレイボーイ』は、女性を交換可能な商品とし、性を商品化することによって、女性を車やスーツのような高価な所有物——男性社会での地位を示すもの——に非常に近い存在へと変えてしまう。この点で、『プレイボーイ』は少なくとも人々の夢や願望（男女ともに）と性を結びつけているハンキンソンの小説よりも悪いとさえ言えるだろう。

『プレイボーイ』において誰がモノ化されているのか。直接的には、モノ化されているのは表現された女性であり、その写真が掲載されている女優が間接的にモノ化されている。しかし、『プレイボーイ』の一般化されたアプローチ（「なぜ私たちはテニスが好きか」や「アイビーリーグの女性たち」といった特集記事）——特に、絵画やフィクションではなく実在の女性の写真に焦点を当てることにより——は、テニス選手に類似する実在の女性が『プレイボーイ』の選ばれた少数者と同じ役割を簡単に演じられることを強く示唆している。このようにして、読者に対して、現実の女性のクラスを幻想的にモノ化する構造が作られる。マスターベーションの補助として使用される際、それは女性の主体性や自律性をより全面的に認識する際に伴う困難を避け、簡単に手軽な満足が得られるという考えを助長する^{*59}。

ここで、ロレンスをポルノ製作者と区別するもう一つの特徴を観察できる。ロレンスの作品において、性的行動が評価される男性は、常に世間的な地位や名誉には無関心である。彼らが女性を所有物や賞品のように扱い、自分の人生における存在や自分への性的関心が男性社会での地位を高めるものと考えてことは、最も遠い発想である。（実際、女性に対するそのような地位中心の態度は、ロレンスの描くクリフォード・チャタレーのキャラクターにおいて、性的不能と結びつけられている。）メラーズが更衣室で昨夜の「ホットな相手」について自慢するような姿や、コンスタンスの胸や尻、あるいは彼女の性的行動を男性社会の見せ物として扱うことは、想像することさえ難しい。メラーズ（やトム・ブランウェン）に最も特徴的なのは、世間的な名声や権威の印に対する深い無関心であり、これがコンスタンス・チャタレーや読者が、彼による彼女のモノ化が商品化（私の言葉で言えば、道具化/所有）とは全く異なると信じる理由の大きな部分を占めている。

『プレイボーイ』は、車雑誌のようなものであり、車の代わりに人間を扱って少しかだけセクシーにしている——ただし、ハンキンソンの意味で、人間を物として扱うことが物自体を持つことよりもセクシーであるとされる。これは、より大きな制御を示し、制御を免れがちな存在を制御できることを示すからだ。この雑誌は男性同士の競争をテーマにしており、メッセージは、一定の地位や金を達成した男性には、より交換可能な女

人物が、より歪められていない、より複雑な関係を求める可能性が低くなると主張している。アシターの論文には、ヘーゲルの主人と奴隷の弁証法に対する貴重な並行性も含まれている。

^{*58}Lorde, "Uses of the Erotic," p. 54: 「しかし、ポルノグラフィはエロティックな力を直接的に否定するものであり、真の感情を抑圧するものだ。ポルノグラフィは感情のない感覚だけを強調する。」

^{*59}See Assiter, "Autonomy and Pornography," pp. 66-69. たとえ『プレイボーイ』の女性の描写が十分に非人間化して「モノ化」と言えるほどではないと確信できなくても、この批判を受け入れることはできる。

性が容易に供給される、あるいは雑誌を通じてそのような幻想的な女性が提供されるというものだ。これは、古代ギリシャの勝利した戦士が、7つの三脚、10タレントの金、20の大釜、12の馬、7人の女性を報酬として与えられるという考えとあまり違いはない^{*60}。モノ化は、ある種の自己顕示的な見せびらかしを意味している。

さらに述べるべきことは、『プレイボーイ』の世界では、業績や才能を持つ女性を手に入れることが、未特定の女性よりもステータスに結びついているために、よりセクシーであるということだ。それは、メルセデスを持つことがシボレーを持つよりもセクシーであるのと同じように、アガメムノンがアキレスに贈る馬が賞を獲得した競走馬であり、女性たちも美しく織りの技に秀でていと保証するのと同じである。しかし、洗練された女性は、洗練された車よりもさらにセクシーである。車はただの物であるため、完全に支配することはできないからだ。『プレイボーイ』が読者に繰り返し伝えるメッセージは、「この女性が誰であろうと、彼女が何を達成しようと、あなたにとって彼女は性器であり、すべての虚勢はあなたの性的な力の前に消える」というものである。一部の人にとっては彼女はテニス選手かもしれないが、あなたの心の中では彼女を支配し、性器へと変えることができる。ブラウン大学の学生であっても、あなたにとっては「アイビーリーグの女性」である（これを書いている時点で準備中の特集であり、私の学生たちの間で激しい議論的となっている^{*61}）。どんな人物であっても、これらの女性たちは（マスターベーションの幻想の中で）あなたの性的な力に喜びの声を上げるだろう。これが『プレイボーイ』の最大の魅力であり、男性に「特別で強力な存在」であると感じさせる願望を満たし、現実世界ではドナルド・トランプのような人々にしか与えられないと思われている地位の象徴を自分も手に入れられると語りかけるのだ。これこそが、現代の姿をしたクリフォード・チャタレーの不毛な地位追求であると、ロレンスは見抜いているだろう。

私は『プレイボーイ』は男性に悪い影響を与えると結論づける^{*62}——これは驚くべき結論ではない。私はこの判断から法的な意味合いを引き出すことはしないが、ハンキンソンの場合と同様に、少年や若い男性を教育する際にこの問題を真剣に考えるべきだと思う。このようなモノ化のスタイルが蔓延している状況に対しては、批判をもって対処すべきであり、その最も力強い形は、アンドレア・ドウォーキンが言ったように、常に自分自身の人間性を主張することである。

ホリングハーストは、非常に興味深い曖昧さに満ちたケースである。表面上、この場面は、エイズ以前の男性ゲイサブカルチャーの一部を特徴づけた性的交換可能性の豊かな受け入れを示している。これはハンキンソンや『プレイボーイ』で行われる身体の部分のエロティック化とは非常に異なっており、むしろモリー・ブルームに似ている。器官の大きさを楽しむことが、背後にいる人々に対しては感情的には浅いものの、非搾取的で明るい態度と結びついている。リチャード・モーアはこの種の奔放な性行為について、匿名のバスハウスでの結びつきが階級や地位の違いを無視することで、民主主義のある理想を具現化すると述べている。ホイットマン的な熱狂の中で、モーアは「私が論じてきたゲイの性行為は、民主主義の正当化に必要な、そしてそれ

^{*60}See Homer, Iliad IX.121-30: これは、アガメムノンがアキレスの怒りを和らげるために提示した申し出である。

^{*61}論争の本質は、女性がモデルとして雇われることを許容すべきかという倫理的な問題にあり、その際、彼女たちが一般的にブラウン大学の女性を代表する役割を与えられるということ、そしてブラウン大学の女性全体がそのような代表されることを望んでいなかったという事実に関係していた。また、学生新聞が募集広告を掲載するべきであったのかという問題も提起され、キャンパスの世論がこれに反対していたことを考慮に入れつつ、学生たちはより一般的な倫理のおよび法的な問題について議論するフォーラムを主催した。実際の募集はキャンパス外で行われたため、それ以上言うべきことはなく、事実としてブラウン大学はアイビーリーグの中で最も多くの応募モデルを出した。

^{*62}私は、ウェイン・ブースの『私たちが保つ仲間たち』(上記参照)における「悪い影響」という概念を念頭に置いている。これは、読む間に思考や欲望に費やす時間が悪い方向に使われる場合のことである。本記事では、その時間と他の時間との因果関係について主張するものではないが、この種の幻想に結びついた快楽を習慣化することが、女性の主体性や自律性をより完全に認識する関係ではなく、こうした手間のかけられない関係を現実で求める可能性があるという、アンターの主張を納得できるものと感じている。

を支えるような根本的な平等を象徴し、また生み出す」と結論づけている。この考えは、匿名の結びつきが特に根本的な問題において、すべての人が他のすべての人と平等であることを示すというものだ。モーアは、これが男性同士で可能であるのは、彼らがすでに社会的に身体以上の存在として認められているからであり、男性間でのモノ化の社会的意味が、男性と女性の間での意味とは全く異なるからだと明確に述べている。このような状況において、奔放で匿名の性行為は平等の規範を体現することができる。

モーアが民主主義に関して重要な点を指摘していることは間違いない。特に、身体の交換可能性が持つ道徳的役割については、功利主義やカント主義のリベラルな伝統においても重要であると考えられる。確かに、すべての市民が似たような身体を持ち、似たような事故に見舞われる可能性があるという事実は、ルソーやウォルト・ホイットマンといった多様な民主主義の理論家たちの思考において重要な役割を果たしてきた。このような平等主義的な考えがホリングハーストにも、一部の場面で表現されている。しかし、問題の性的な場面がどのようにして、民主主義的な伝統を支える身体的なニーズに対する平等な配慮を示しているのかを理解するのは少し難しい。注意すべきは、階級や地位の違いが常に存在していることであり、たとえそれが表面上は押しつけられているように見えても、語り手は人種的な違いに強く意識を向けており、それを性器のサイズに関するステレオタイプと結びつけている。さらに、下層中産階級を示すサイクルクリップやダッフルコートは、目に見えないときでさえも意識され、隣人の「にやにや笑う」男性の小さな性器に対する軽蔑的な描写は、これらの劣等性の兆候に対する「ジャケットとネクタイ」の軽蔑を強く示唆している。実際、描写されるすべての性器はステレオタイプであり、メラーズが「レディ・ジェーンの性器」に対して抱いたような個別の配慮は見られない。

さて、この交換可能性の強調とどのように関連しているのかという問いが生じる。モーアは、おそらく、この語り手が上流階級のイギリス人であり、バスハウスの世界の民主主義的精神に十分に入り込めていないだけだと主張するだろう。しかし、交換可能性の精神と、人種や階級、性器の大きさといった表面的な要素に焦点を当てることとの間に何かしらの関係があるのではないかという疑念は残る。これらは確かに人間性を奪い、人々を潜在的な道具に変えるように見える。相手との物語的な歴史が存在しない場合、欲望は偶発的なものにしか注目できず、他者の身体を自分の欲望を満たすための道具として使用する以上のことはできないのではないだろうか。モーアがこの考えを説明するために用いる写真は、筋肉や性器のサイズといった極端な男性的特徴に集中しており、おそらくこれらの特徴はこの世界のすべての市民に等しく分布しているわけではない。また、そのように構築された世界は、道徳的に無関係な特性がすべてを決定する、極めて階層的な世界であると考えられ、階層が存在しない世界ではないのかもしれない。これは結局のところ、人々が交換可能なものとして扱われていないことを意味するのかもしれないが、もし彼らももっと完全に交換可能なものとして扱われるならば、物事がうまくいくのかもしれない。しかし、このような交換可能性を構築するために、人間性の核心にある本当の民主的平等を否定する場では、うまくいくとは考えにくい。これは、モーアのホイットマン的理想が失敗に終わることを示す決定的な論拠ではないが、交換可能性と道具性の関係が緩やかで因果的である以上、懸念は残るだろう。マッキノンやドウォーキン、ロードやロレンスも共有するであろう懸念として、ホリングハーストの描写する匿名的な精神で人と性行為をする場合、本当に民主主義が求める敬意と配慮をもって接することができるのだろうか。

最後に、『黄金の盃』の終わりにたどり着いた。私の考えでは、この箇所はリストの中で最も陰險な場面であり、登場人物の行動に焦点を当てると、最も明確に道徳的に非難されるべき道具化を描いている。ただし、小説全体の主旨はこの行動を問い直すことにある。アダムとマギーにとって、配偶者を精巧なアンティーク家具のように扱うことは、人間としての地位を否定し、その優雅で美しい身体を永久に利用する権利を主張する方法である。この扱いは自律性の否定を伴い——シャーロットはアメリカの博物館に送られて「埋葬」され、

プリンスは欠陥のある優雅な家庭用オブジェクトに変えられなければならない——また、主体性の否定も伴う。アンティーク家具として評価することは、「彼らが苦しんでいるかどうかを考える必要はない」と言うことに等しく、彼らが発する主張を無視してもよいとする態度である。Sposi（配偶者たち）は道徳的にも感情的にも無力化され、ある意味で交換可能な存在として扱われる——マギーは夫を芸術作品として扱うことが彼の個人的な独自性を無視することだと当初から認識していた。実際、この場面では身体的な侵害を除くリストのすべての項目が見られる——そして、感情的な侵害は十分に確認されている。

これにより、人間の非人間化やモノ化には多様な形態があることが分かる。モノ化の「核心」が性的なものであるとか、その主な媒介が男女の特定の性的教育であると決めつけるのは簡単ではない。ミルは、自分の社会の男性の教育全体が支配と利用の教訓を教えると述べており、その責任を性的な教育に限定しているわけではない。ここで思い出すのは、道徳的に陰險なモノ化が性やジェンダーの役割とは特に関係のない場合もあり得るということだ。マギーとアダムは、金持ちの収集家としての立場から人に対する態度を学んだ。この態度はおそらく性にも影響を及ぼすが、その根本は別のところにあり、ジェイムズがアメリカと結びつける金銭や物に対する態度に由来している。裕福なアメリカの世界では、すべてのものに価格があり、十分に裕福であれば本質的に制御可能で利用可能なものと見なされている。何も自己目的ではなく、唯一の目的は富である。

語り手の懐疑的な介入により、「必要以上に深く見つめる視線」で私たちが実際に見ているのは、「希少な購買力の具体的な証」であることが指摘されている。

このことは、我々の問いを複雑にする。カント、ドウォーキン、マッキノンが主張する、性的欲望の歪みが他の形態の性的パートナーのモノ化に先行し、それを引き起こすという主張を問い直す必要があることを示唆している。また、多くの場合、物や人に対する態度の先行する歪みが欲望に浸透し、それを毒する可能性があるようにも思える^{*63}。この問いをさらに掘り下げることはできないが、性的モノ化の物語において次に書かれるべき章への提案として、この問題をここに残しておく。

結論として、7つのモノ化の形態に立ち戻り、議論をまとめたい。カント、マッキノン、ドウォーキンが中心的な洞察において正しいように思われる。それは、人間を他者の目的の道具として扱うこと、すなわち人間を道具として扱うことが常に道徳的に問題であるということだ。このような扱いが人間性に対する配慮の大きな文脈中で行われない限り、それは道徳的に非難される中心的な形態である。また、これは特に（ただし男性による女性の扱いに限らず）性的生活においてよく見られる特徴である。このため、それは他の形態のモノ化、特に自律性の否定、主体性の否定、そしてさまざまな形態の境界侵犯と密接に結びついている。ある形態では、交換可能性や所有または準所有（いわゆる「商品化」の概念）とも関連している。

一方で、リストに挙げた他の項目については、常に道徳的に非難されるとは限らないように思われる。自律性の否定や主体性の否定は、成人の関係において持続的に行われる場合には問題だが、相互の尊重を特徴とする関係の中での一時的な局面としては問題ない場合もあり、ロレンスが示唆するように、むしろ非常に素晴らしいことさえあるかもしれない。これに密接に関連して、相手を受動的、あるいは無活動的に扱うことが、時には素晴らしいことになることもある。境界の感情的な侵入は、性的生活において非常に価値のある部分である可能性があり、身体的な境界の侵入も同様に重要であるが、どの形態が適切かはより明確ではない。交換可能性として扱うことは、そのように扱われる人が、過去にしばしば商品化され、道具や賞品として利用されてきたグループである場合には疑問が生じるが、社会的に対等な者同士であればこれらの問題は消えることがあるものの、他の問題が生じる可能性がある点については明確ではない。

^{*63}See Ahearn, *Marx*, p. 99: 「美的なものの賛美と人を利用するという二つの取得の形態は、最初の蓄積 [『黄金の盃』の登場人物の]、つまり愛すべきアダム・ヴァーヴァーの富に根ざしている。」

モノ化の原因については、カントの見解——すなわち、害悪な形での利用は性的欲望と行為そのものに内在するという考え——に疑問を抱く理由がいくつかある。マッキノンとドゥウォーキンの見解——社会的階層が欲望の歪みの根本であるとする考え——を支持する理由はあるが、ロードとロレンスは、歪みがポルノだけでなく、ピューリタニズムや女性のエロティックな経験の抑圧を通じても生じていることを示している*64。その意味で、ロレンスが述べるように、身体の部分に対する特定の種類のモノ化された注目が、歪みを是正し、本当のエロティックな平等を促進する重要な要素であるという主張は一理あるかもしれない。最後に、私たちは、これらのモノ化や商品化の問題において性的欲望がどの程度中心的な役割を果たしているのか、本当に把握しているわけではないことも認めるべきだ。たとえば、私たちの文化において欲望を強力に構築する経済的な規範や動機と比較して、性的欲望がどの程度の影響を持つかについては、まだ未知の部分が多い。

論理的な締めくくりが特に必要ではない本稿は、概念の初歩的な探究として位置づけられており、その全貌を明らかにするには、さらに多くの調査が必要となる。したがって、モノ化と呼ぶべきものを含む二つの文学的な場面を並べて締めくくることが適切かもしれない。一つは、ジェームズ・ハンキンソンの作品を通じて、カント的なプロジェクトであるマッキノンとドゥウォーキンの動機を鮮やかに思い起こさせるものである。もう一つは、ロレンスが示すように、ある種のモノ化が喜びの源となり得る条件を提示する場面である——これは、カント、マッキノン、ドゥウォーキンがそれぞれ異なる方法で、異なる理由で、異なる強さと普遍性をもって否定している可能性について言及している。

彼女は彼の足の裏が腰に触れるのを感じ、次に鞭が自分の肉に打ち下ろされるのを待つ。それが永遠にも感じられるが、ついに鞭が彼女の尻に正確に落ち、痛みが全身を駆け抜けると、彼女は罪を焼き尽くし、自分を再び完全にするような燃えるような救済のスリルを感じる。そして、マクレーが再び何度も鞭を打ち下ろすと、彼女は罪が自分から剥ぎ取られるのを感じ、「世の罪を取り除く神の子羊」の言葉が心に浮かび、焼かれることによって火から救われた魂たちが並ぶ楽園への道を視界に捉え、自らもマクレーに感謝して、自らを再び浄化するための鞭打ちに感謝する。

「でも、あなたは何を信じているの？」彼女は食い下がった。「俺は温かい心でいることを信じている。特に愛において、セックスをするときには温かい心でいることを信じている...」彼女は彼の腹に頬をそっと擦り付け、手で彼の陰囊をそっと包んだ。彼が話す間中、彼は滑らかで火のような感触が彼の手伝に伝わるまで、その丸みを帯びた尾を絶妙に撫で続けた。「おまえがうんこしても小便しても、俺は嬉しいよ。うんこも小便もできない女なんて欲しくないんだ...」彼は静かに指を動かして、忘れな草の花をヴィーナスの丘の柔らかな茶色の毛の中に編み込んだ。

*64 この二重の原因論は、ドゥウォーキンの『インターコース』のいくつかの部分、特に「塵／汚れ」で示唆されている。また、アンドレアが他の男性と性行為をしていたことを知った後にギリシャ人の恋人が彼女を虐待するという『マーシー』のエピソードにも見られる。